稗田頭C遺跡

——平成5年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1994. 3

茅野市教育委員会

HIEDAGASIRA-C SITE

稗田頭C遺跡

――八ヶ岳西南麓に於ける縄文時代中期初頭の集落址の考古学的調査――

1994. 3

茅野市教育委員会

稗田頭Ｃ遺跡周辺の地形と景観（奥に稗田頭Ａ・Ｂ遺跡）

序　文

稗田頭Ｃ遺跡は平成５年度県営圃場整備事業槻木地区に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

稗田頭Ｃ遺跡はその存在が不明で、急遽事業に先立ち実地踏査の結果新たに認定されたものです。そのために遺跡の規模、内容が不明確な部分がありましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになりました。

発掘調査では700基にも及ぶ縄文時代中期初頭の土坑群とそれに伴うように中期初頭の竪穴住居址９軒が検出され、市内では確認例の少ない中期初頭の集落址の全貌を把握することができました。また、これらの遺構に加えて平安時代後半の竪穴住居址１軒が検出されたことは平安時代の集落展開を考える上に貴重な資料です。

本遺跡の立地する地域は平成２年度から県営圃場整備に伴って埋蔵文化財の調査が行われ、上見遺跡、中原遺跡、稗田頭Ａ遺跡について数々の調査成果が得られています。それによるとこの地域が縄文時代中期初頭において多くの集落が展開していたことが判明しており、今年度も本遺跡に隣接する地域で実施された稗田頭Ｂ遺跡も同時期であることが確認されております。これらの成果に本遺跡の調査成果を加えると、この地域における縄文時代中期初頭の遺跡間の相互関係や領域を復元することも可能となることでしょう。

今後県営圃場槻木地区の施工に伴い埋蔵文化財の調査が広域に亘りなされる計画ですが、これらの調査により得られた数多くの資料に基づき槻木地区における縄文時代の生活領域や遺跡群の相互関係が判明し、また、これらの成果をもとに八ヶ岳西南麓における遺跡群の在り方もより解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成６年３月

茅野市教育委員会

教育長　両角昭二

例　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長中平龍興と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成５年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う、長野県茅野市泉野稗田頭Ｃ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成５年度にに実施した。調査の組織等の名簿は第II章第１節４．調査の体制として記載してある。

3．発掘調査は平成５年７月14日から12月１日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成５年12月から平成６年３月まで茅野市文化財調査室において行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第II章第１節２・４に記してある。

5．本報告書に掲載の遺構実測図は竪穴住居址1/60、土坑等は1/40の縮尺とした。

6．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

7．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管されている。

目　　次

序　文　　茅野市教育委員会教育長　両角 昭二

例　言

第Ⅰ章　遺跡の概観 ……1

第１節　遺跡の位置と環境 ……1

１．遺跡の立地と地理的環境 ……1

第２節　遺跡周辺の歴史的環境 ……2

１．遺跡周辺の遺跡 ……2

第Ⅱ章　発掘調査の概要 ……3

第１節　発掘調査に至るまでの経過 ……3

１．調査に至るまでの協議 ……3

２．発掘調査・遺物整理・報告書作成の方法とその経過 ……4

３．調査日誌（抄） ……5

４．調査の体制 ……5

第２節　発掘された遺構・遺物 ……6

１．遺構・遺物の概要 ……6

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物 ……9

第１節　遺跡の層序 ……9

第２節　発掘された遺構……10

１．平安時代の竪穴住居址……10

２．縄文時代の竪穴住居址……12

３．縄文時代の土坑と他の遺構……24

４．縄文時代の遺構の構成……33

第３節　発掘された遺物……36

１．平安時代の遺物……36

２．縄文時代の遺物……37

第Ⅳ章　調査の成果と課題……46

第Ⅴ章　結語……52

図　版

第Ⅰ章　遺跡の概観

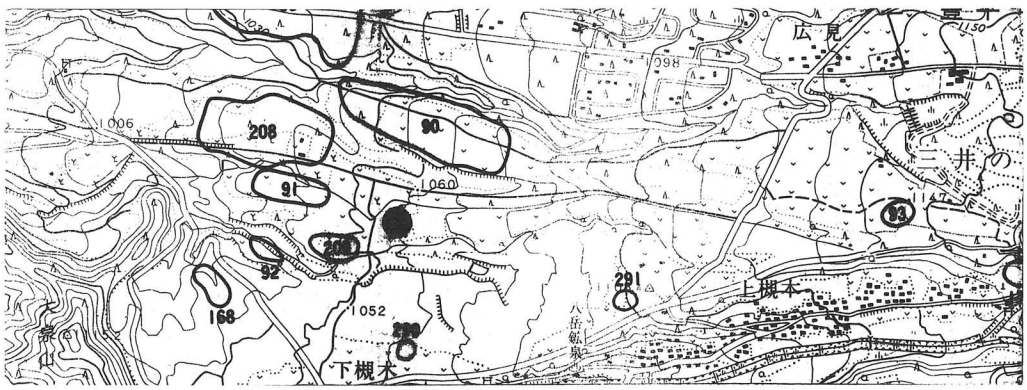
第１節　遺跡の位置と環境

1. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置　稗田頭Ｃ遺跡は長野県茅野市泉野3,512番地他に所在する。ＪＲ中央本線茅野駅から北東方向に約７㎞のちょうど八ヶ岳西南麓のほぼ中央部にあたり、遺跡の南側0.6㎞に泉野下槻木の集落が位置する。

遺跡の地理的環境　稗田頭Ｃ遺跡は、八ヶ岳の火山活動により形成された尾根状台地に立地し、本遺跡の立地する台地南側柳川に沿って槻木地区が、台地西側に位置する大泉山を隔てて大日影地区が位置する。遺跡の立地する台地は、八ヶ岳の山腹に位置する広見地区の上部より尾根状台地が分岐し、ちょうど西側に広がる形の割合幅広の台地が広がり、その末端部は分岐し小さな枝状の細長い尾根状台地を形成する。遺跡の位置する部分は台地が分岐する直前に位置し、台地の幅は本遺跡の西側に近接する稗田頭Ｂ遺跡や、下方に位置する稗田頭Ａ遺跡の立地している台地に比較して幅に広がりを持つ。

台地の上部の現況は平坦で、西側へやや傾斜しており、台地先端では急傾斜となる。平坦な部分は幅が広く遺跡範囲の標高は1,060m から1,065m である。現況では平坦な状況を示す台地であるが、微細に観察すると小規模な浅い谷状の地形が手状に入り組んでおり、かなり複雑な様相を示している。南側の斜面は急峻な斜面となり、沖積地面と接する裾部は浸食作用の進んだ八ヶ岳西南麓特有の切り立った崖状である。台地と沖積地面の比高差は12m を測り、沖積地面より見ると切り立った孤立丘陵状を呈する。北側は現在の状況は切り立った崖状を呈し、崖下に流下する河川による浸食が見られるが、この河川が近世の用水であることを考慮すると、北側は現在の河川箇所で分断しておらず、北側下方に位置する金堀場遺跡と同一の台地の面に位置していた



第１図　稗田頭Ｃ遺跡の位置（1/25,000）

ものと思われ、北側の所謂二重掘りと呼ばれる深い谷を挟んで鴨田遺跡と対峙する。

湧水は南側に位置していた槻木溜池周辺が小規模な湿地状を呈し、小規模ながら湧水を見ることができたようであり、近世にこの小湧水に他からの引き水を加え現在の河川が作り出されたようである。また、地元の人々の談によると台地先端の北西谷部に鉱泉が湧出していたとのことである。

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

１．遺跡周辺の遺跡

周辺の遺跡　遺跡周辺には数箇所の遺跡が点在している。本遺跡の立地する台地下方に約200ｍ離れて稗田頭Ｂ遺跡、この台地の先端部に稗田頭Ａ遺跡、北側へ谷を隔てて金堀場遺跡、鴨田遺跡、新水掛遺跡、尖石遺跡と縄文時代中期の大規模な集落遺跡が続く。また、南側に谷を挟んで上見遺跡が位置する。周辺の遺跡のあり方は本遺跡の性格を探る上に重要であり、また、本遺跡の周辺に位置する稗田頭Ａ遺跡、稗田頭Ｂ遺跡、中原遺跡、上見遺跡は大きな単位として括ることができそうであり、これらの遺跡について若干概略を記述する。

上見遺跡　平成２年度に県営圃場槻木地区の施工に伴い調査が行われ、先土器時代の遺物ブロック、縄文時代中期初頭の土坑、陥し穴群が検出されており、土坑を中心とした居住空間とは異なる性格を有している遺跡と捉えられている。

中原遺跡　平成３年度に県営圃場槻木地区の施工に伴い調査が行われ、縄文時代早期末から前期初頭の竪穴住居址２、中期初頭の直径が９ｍもある大型竪穴住居址１、陥し穴１、土坑７が検出されており、隣接する位置にある土坑群や陥し穴群を中心に構成される上見遺跡と密接な関係を有していたことが想定されている。

稗田頭Ａ遺跡　平成４年度に県営圃場槻木地区の施工に伴い調査が行われ、縄文時代前期末竪穴住居址１、中期初頭竪穴住居址３、中期前半竪穴住居址４、中期後半竪穴住居址24、後期住居址１、陥し穴５、土坑約350が検出され、周辺に位置する他の遺跡よりも割合規模が大きく、長期に亘って継続する遺跡であることが判明している。

稗田頭Ｂ遺跡　平成５年度に本遺跡と並行して調査が実施され、縄文時代中期初頭竪穴住居址９、陥し穴13、土坑53が検出されており、縄文時代早期の陥し穴が若干含まれるものの、中期初頭の単純集落であることが判明している。

これらの遺跡はその位置関係や遺構の時期構成から看ると、縄文時代中期初頭において遺跡群を形成していたものと考えることができ、単に本遺跡だけの在り方だけではなく他の遺跡の在り方も含めて遺跡の内容の構成を考えることで、この地域の持っている歴史的な背景が鮮明になる。北側稗田頭Ａ遺跡までは小規模な遺跡が谷を挟んで隣接する状況で位置しており、一つの遺跡群を構成する状況にある。遺跡規模の差はあるが、本遺跡の立地する周辺は遺跡の集中箇所として捉えることができ縄文時代の遺跡の相互関係を調査するためには重要な地域である。

第II章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

1. 調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過　本遺跡は文化庁が主体となって行った昭和54年度広域遺跡保存対策調査研究の際や、茅野市史に於ける調査では未確認の遺跡で、平成４年までの茅野市遺跡台帳には登録されてはいなかった。平成５年度県営圃場整備事業槻木地区の実施に先立ち、同地域周辺の埋蔵文化財の有無の確認が必要となり、平成５年３月26日に同地の表面採集を実施し、遺物の散布が認められたために、新発見の遺跡として４月８日付で文化庁へ新遺跡発見届を提出した。遺跡名については周辺一体の小字が稗田頭であることより、稗田頭とし他の稗田頭Ａ・Ｂ遺跡と区別し、稗田頭Ｃ遺跡とした。

表面採集の結果によると縄文中期初頭土器片が台地中央部の平坦な部分の範囲に稀薄に散布しており、この平坦部を中心に遺跡が展開するものと予測できたが、水田部分については表面採集が実施できないために遺跡の広がりを明確に把握することはできていなかった。遺跡の広がりと遺構の埋蔵状況を把握するために試掘調査を実施する必要性が生じた。

試掘調査とその成果　本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。そのため本調査に入る前に台地上における遺構の広がりと、遺構・遺物の埋蔵状況の確認であったために、任意に地形に沿った形で台地を横断するように、トレンチを設定し、遺構等の埋蔵状況等について試掘調査を実施した。その結果遺構の広がりは台地中央部から南側にかけて幅が約100m、東西方向に約70m の範囲であることが判明した。試掘調査の結果水田部分、畑地部分共に造成工事による攪乱が至っており、遺物の包含層の摘出、生活面の把握を行うことはできなかった。

本遺跡が未登録の遺跡であったために、平成５年度実施の県営圃場整備に係る埋蔵文化財発掘調査計画には上がってはいなかったが、遺跡範囲が平成５年度施工区に該当していたために、急遽事業計画に入れ、本遺跡を取り扱う必要が生じ保護協議に入った。

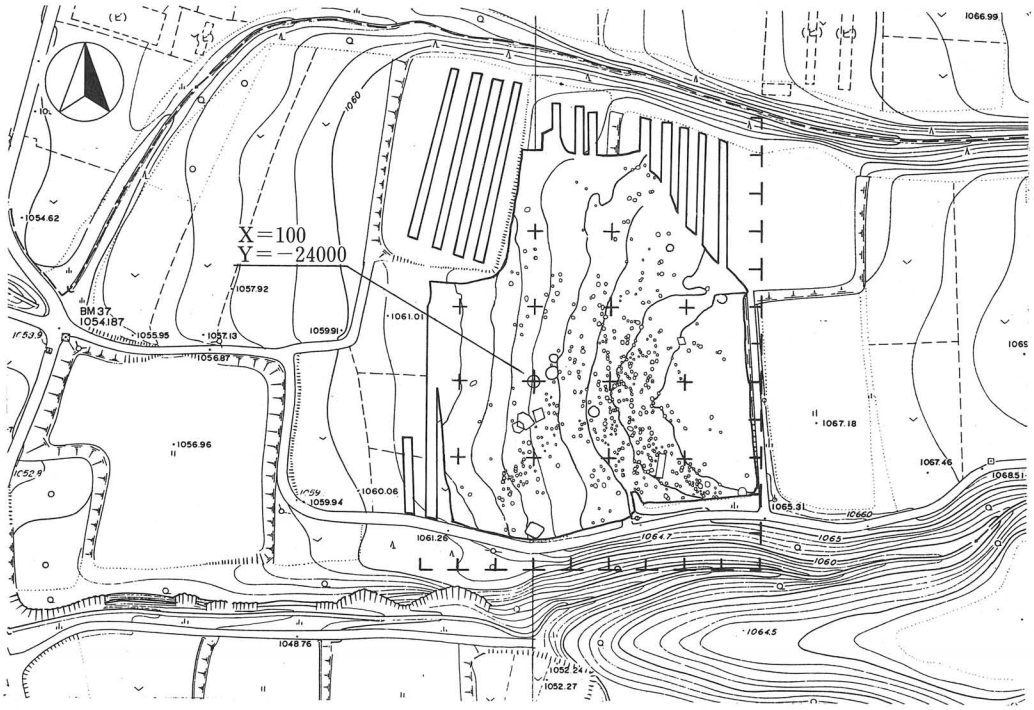
本調査に至るまでの協議経過　本遺跡についての協議が４月27日に開催され、その結果本年度に記録保存を前提とした発掘調査の実施を実施し、調査費の積算については試掘の成果を踏まえ、補正予算で対応することとした。この協議結果は平成５年５月17日付５教文第７-12-２号、平成５年度県営圃場整備事業（茅野市槻木地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると遺跡の保護については、事業地区内にかかる5,280㎡以上を発掘調査し、記録保存をはかるというものであった。この計画に基づき、平成５年６月25日付５諏地土第22-３号をもって「埋蔵文化財発掘調査業務変更委託契約書」を取り交わした。それによると総額11,600,000円（農政部局負担10,208,000円、文化財負担1,392,000円）で事業

を行うこととした。

2. 発掘調査・遺物整理・報告書作成の方法とその経過

調査区の設定　遺跡の範囲を把握するために台地を切る形で設定した試掘トレンチにより確認された遺構の広がる部分について、面的な調査を実施する部分とし調査区を設定し、表土の除去が重機を用いて行われ、遺構の広がり全域に亘って拡張を行った結果、検出された遺構の特性から当初予定していた調査範囲約5,000㎡より大幅に広がり最終的には8,480㎡となった。

発掘区内のグリット設定については、公共座標ｘ＝100、ｙ＝-24000を基準軸とし、この交点より20m ピッチで基本杭を設けた。このように設置した20m ピッチの範囲を大グリットとし、この内部を更に10m ピッチに分割した。ベンチマークは圃場整備事業ＢM37より基準軸の交点に引き1063.234m を設定した。



第２図　稗田頭Ｃ遺跡の地形と発掘区（1/2,000）

発掘調査の方法と経過　遺構確認調査により遺構は台地中央部を中心に展開するもので、土坑が群をなし大きくまとまり、この外縁部に住居址が伴うように存在することが確認された。試掘の結果住居址は耕作等により攪乱を受けて平面プランに不鮮明な部分があり、また、数軒の重複が認められた。遺構群が展開する部分は台地中央部に限定されていたが、土坑が主体を占めることより土坑の土層観察やその量によりはかどらず、また、８月から９月に於いては天候も不安定で、予定よりも作業工程は遅滞し最終的に現場における作業が終了したのは12月１日である。作業工程の短縮や鳥瞰写真の必要性から航空写真測量を実施した。

遺物整理と報告書作成の方法と経過　遺物整理、報告書作成が本格的に開始となったのは、発掘調査が終了した12月からである。遺物素図の一部は写真測量を実施した。報告書の作成は柳川、守矢が行った。原稿の執筆は柳川、守矢が行った。執筆分担は文末に記してある。報告書作成期間や頁数等の制約より全ての遺物を資料化することができず、遺構を中心とした報告となっている。今後検出資料も加え周辺の遺跡の状況等を踏まえて総合的に考える必要があろう。

3．調査日誌（抄）

7月14日　表土剝ぎ、及び遺構確認を行う。
7月19日　発掘作業機材の搬入を行う。
7月22日　遺跡東側の表土剝ぎ終了。
7月24日　表土剝ぎ・遺構確認。遺跡中央部の表土剝ぎを終了。
8月4日　農業基盤整備課の小平久泰係長と、令息2名が来跡し、体験発掘を行う。
8月5日　本格的に発掘調査を開始する。
8月9日　基準グリット杭打ち作業の実施。
8月19日　遺構確認を行う。
8月20日　遺跡東部中央で埋甕を確認する。
8月25日　晴天が続き地面が乾燥してきたため、散水作業を行う。
8月26日　遺跡南部で方形柱穴列を1基確認。
8月30日　遺跡南東部の土坑群の写真撮影実施。
9月6日　台風の復旧作業に追われる。
9月10日　不安定な天気続く。
9月21日　埋甕が、住居址に伴うものであることが判明し、2号住居址とする。
10月14日　航空測量の予定が、関東地方が雨のために中止。
10月15日　第1回目の航空測量を行う。
10月27日　第1・7号住居址の発掘を始める。
10月22日　第5号住居址の発掘を始める。
11月1日　航空測量を行った遺跡東部で、遺物の取上げ作業。
11月2日　第1号住居址の北東部壁際で、鉄滓を発見。
11月5日　県土地改良課今後の作業日程等について打合せを行うために来跡。
11月10日　全ての遺構の調査を終了し、2回目の航空測量に向けて清掃作業に入る。
11月17日　第2回目の航空測量を実施。
11月18日　発掘機材の片付け作業に入る。
11月24日～30日　測量図の点検と校正作業。
12月1日　現場作業を終了し、現地引渡し。

4．調査の体制

調査組織

調査主体者	両角昭二	（茅野市教育委員会教育長）
事務局	原　充	（茅野市教育委員会教育次長）
	永田光弘	（茅野市教育委員会文化財調査室長）
	鵜飼幸雄	（茅野市教育委員会文化財調査室係長）
	両角一夫	（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
	大月三千代	（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）
調査担当	守矢昌文	（茅野市教育委員会文化財調査室主任）（現場担当、報告書作成）

小林深志　（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）
功刀　司　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
小池岳史　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
百瀬一郎　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
小林健治　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
柳川英司　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）（現場担当、報告書作成）

発掘調査・整理作業協力者

有賀あや　有賀博恵　牛山矩子　立木利治　東城生喜　立岩貴江子　富田　長　平沢高明
平沢房江　平沢美知　目黒恵子　矢島時子　矢島のぶ子　矢島ヒロシ

基準点測量委託：株式会社嶺水茅野支店　　遺構測量委託：株式会社東京航業研究所
遺物測量委託：株式会社東京航業研究所

発掘調査期間中、諏訪地方事務所土地改良課におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解と絶大なご協力を賜った。調査の実施に当たっては地元委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。尚、調査等に当り下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

宮坂光昭　会田　進　三上徹也　小安和順　中西真也　斎藤　弘　小坂英文

第2節　発掘された遺構・遺物

1. 遺構・遺物の概要

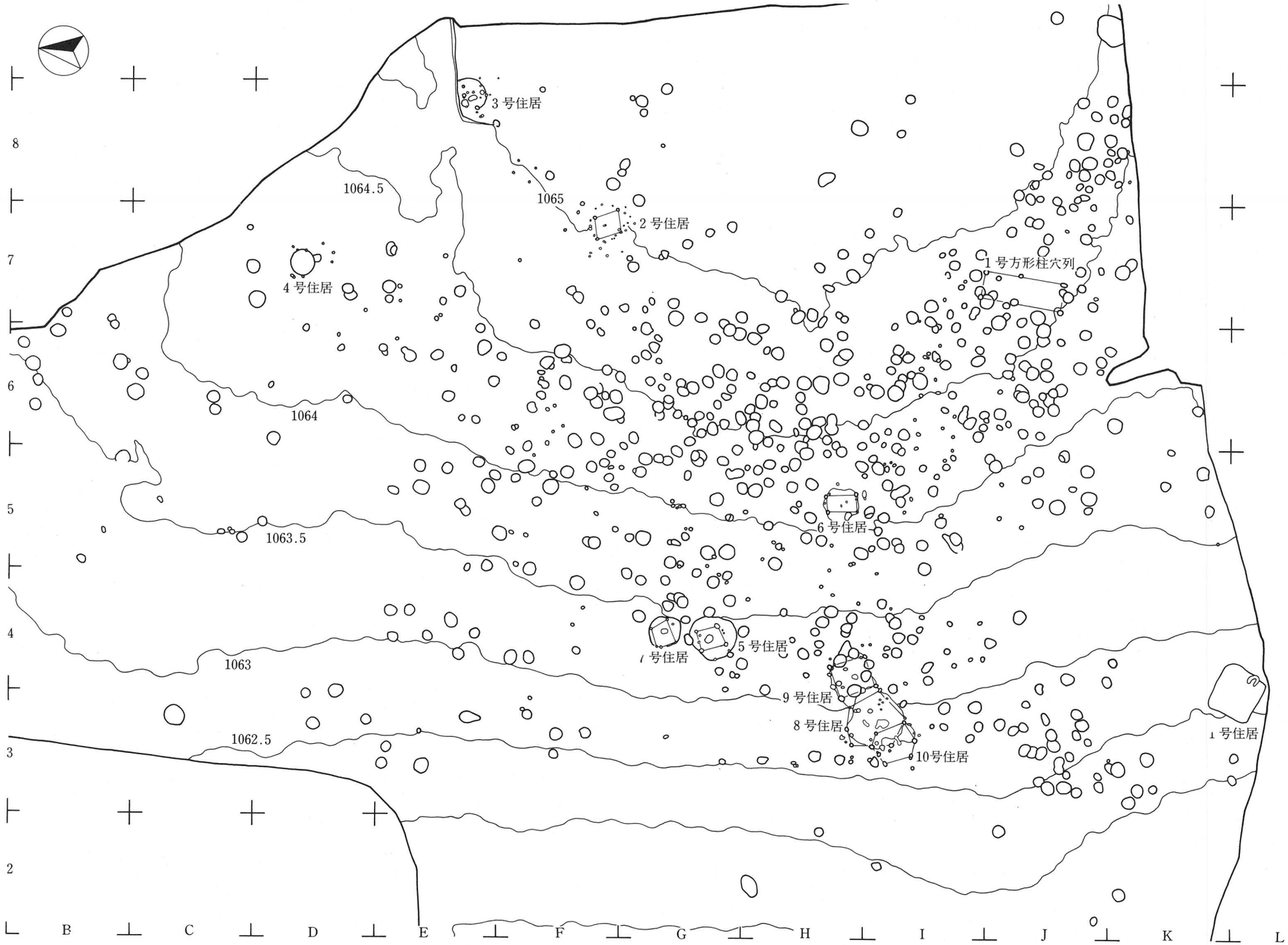
検出された遺構の概要　本遺跡から検出された遺構は縄文時代中期初頭に帰属するものと、平安時代後半に帰属するものだけであり、縄文時代だけを取り上げると、中期初頭の遺構だけで占められ、中期初頭の単純集落であると言うことができる。しかし、中期初頭の遺構に重複関係が認められることより、数段階に亘り集落が変遷したことが窺える。

平安時代後半の竪穴住居址は1軒だけが単独で検出され、当時の八ヶ岳山麓の様相を考える上に貴重な資料を得ることができた。

検出された遺構は縄文時代中期初頭の竪穴住居址9、土坑735、時期不明のローム マウンド4、平安時代後半竪穴住居址1で、土坑が遺構の主体を占める。土坑内に遺物を含まず時期を明確にすることができなかったものもあるが、覆土の状況、分布の状況等より縄文時代中期初頭に帰属するものと思われる。

土坑については地下に掘り込められた「穴」を指し、後章に於いて分類するが土坑番号を付したものの中には竪穴住居址の柱穴や、方形柱穴列を構成する柱穴等が含まれている。

検出された遺物の概要　遺物は縄文時代中期初頭に帰属する土器や石器類、平安時代後半の土器類、鉄滓が検出されている。特筆するような遺物の検出はなされてはいないが、縄文時代中期初頭の遺物を考える上に、多くの知見を得ることができた。　（柳川・守矢）



第３図　稗田頭Ｃ遺跡遺構全体図（1/400）

第III章　発掘された遺構と遺物

第１節　遺跡の層序

遺跡全体が水田や畑地として耕作されており、そのために遺跡の層序全体は攪乱が至り、プライマリーな層序を示す部分は水田土手部に若干認められるだけであった。それによると、基本土層の堆積状況は下記のようである。

Ⅰ層　ロームブロック層　　水田の床土として人為的に埋め戻されたもので、ロームブロックは20cm～30cm大の塊が主体を為す。第Ⅰ層以下が水田造成前の面にあたり、一見すると自然堆積の土層がパックされたような状況に見えるが、畑地を埋立てて水田造成を行っているために、第Ⅰ層以下にもかなりの攪乱が認められる。

II層　漆黒色土層　　旧畑地の耕作土で層全体は締まりの少ないソフトな感触をもち、木目は細かく粘性を帯びる。

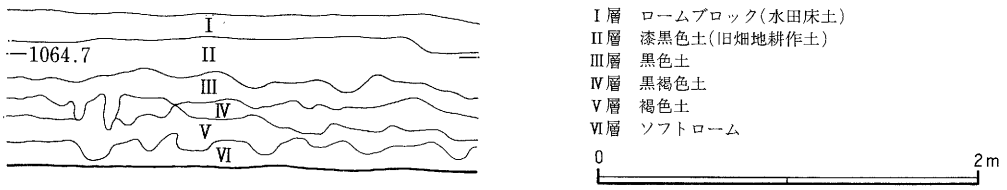
III層　黒色土層　　層性はⅠ層と同様な様相を呈しているが、色調がやや灰色を帯びる。土層内に桑等の根の攪乱が見られる。

IV層　黒褐色土層　　Ⅰ・II・III層に比べて若干ではあるが締まりがあり、内部に１㎜大のローム微粒子を含有している。尚III層内より根の攪乱が及ぶ。

Ⅴ層　褐色土層　　粘性をもち内部に１cm～３cm大のローム粒子を含有している。

VI層　ソフトローム層　　粘性を有し土層全体にソフトな感触を持つ。色調は山吹色に近い色を呈している。

以上のような土層堆積の状況を示していたが、Ⅰ層は現水田に関わるもの、II・III層が開田以前の畑地の耕作土、IV層が縄文時代の遺物の包含層である。遺構の掘り込みはⅤ層より認められたが、生活面のような構成面を把握するまでには至ってはいない。尚、前文にも述べたが基本層序を観察した部分は最も土層の堆積状況に人為的な攪乱等が及んでいない部分を選択して実施したが、実際には現在畑と成っている部分は旧畑地の耕作土であるII・III層を削平して耕作土としており、そのため大型農業機械による耕作の攪乱がVI層上面にまで及んでいる。　　（守矢）



第４図　遺跡の基本層序（1/40）

第２節　発掘された遺構

今回の調査に於いて検出された遺構の概略については第II章第２節において記述しているために重複を避けるが、今回検出された遺構は他の時期との重複がなく縄文時代中期初頭の住居址と土坑の在り方は当時の集落研究を行う上に貴重な資料となろう。また、一軒だけ検出された平安時代後期の竪穴住居址も八ヶ岳西南麓の当時の山麓開発の状況を知る貴重な資料である。

1. 平安時代の竪穴住居址

平安時代の竪穴住居址１が検出されている。遺構より検出された遺物より見ると、平安時代後半に帰属し、単独で位置する点などに興味深いものがあり、同様な状況にあった隣接する台地に立地する鴨田遺跡なども含めて考える必要があろう。

第１号住居址（第５図、図版２）

検出状況　遺跡南西部隅で確認されたもので、唯一の平安時代の住居址である。

遺構の構造　平面形は隅丸方形である。プランは長軸4.02m・短軸3.84mであり主軸はＮ－46°－Ｅ方向である。北東側の壁はしっかりしていて掘り方も確認できるが、南側の壁は攪乱を受けており判然としない。また、西側に傾斜している地形により西側の壁も明確ではなかった。東側の壁面は13cm～26cm、北側の壁面は10cm～18cm、南側の壁面は12cmの高さである。

床面は、北側壁際から東側壁際に、一段高くＬ字型に固い面が確認できる。これは所謂棚状遺構と言われるものであろうか。住居址の中央部には軟質なローム粒子を含む黄褐色土がＬ字型ののの硬い面まで埋め戻されたような状態で遺存していた。北側の一段高い硬い床面上より2cmほど浮いた状態で灰釉陶器皿が逆位で出土した。その状況よりほぼ床直上から出土したと捉えることができよう。硬い床面に囲まれるように中央部に軟質な埋め土的な部分が認められたことは、住居内の床の状況が土間や板床等の区分を示しているものとも考えることができよう。尚、軟質な床範囲の下層に所謂床下土坑が構築されている。

周溝は北・東側の壁際に沿うように確認でき、その幅は最も広い部分で15cm、深さ15cmの幅に比較して浅いものであった。

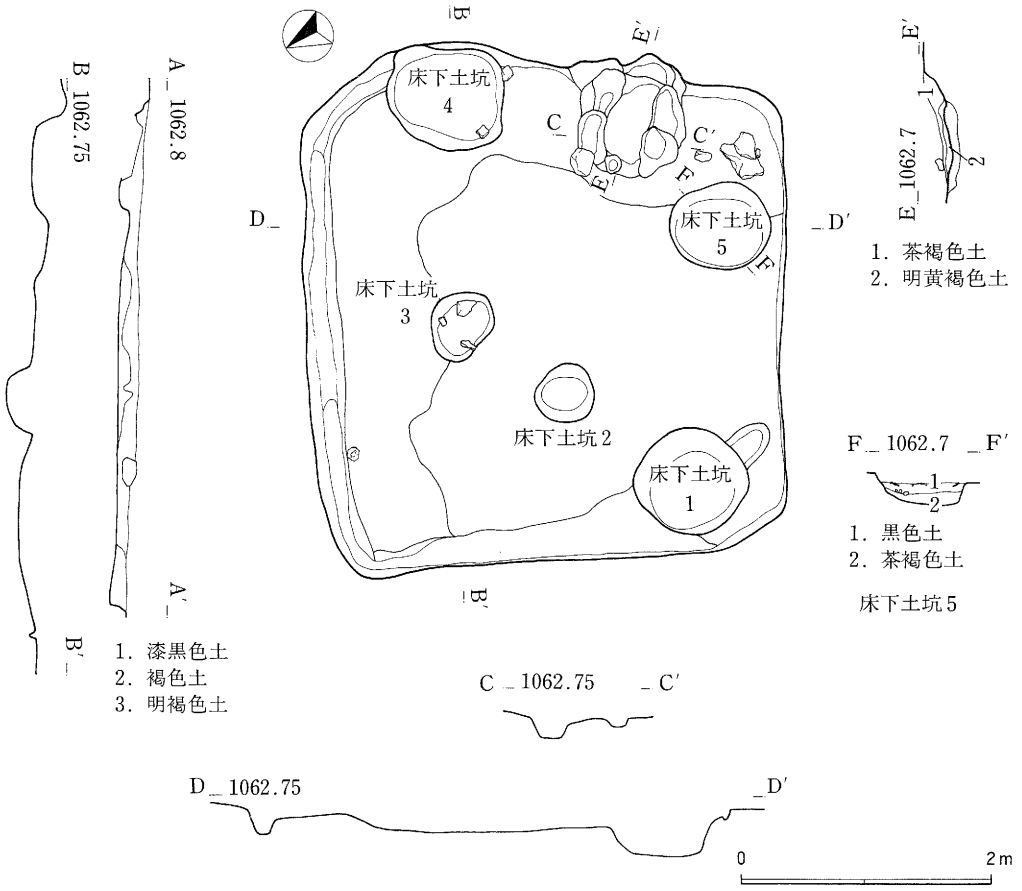
竈は住居址奥壁と思われる南東壁の中央部より南東コーナーへ約95cm寄った位置に構築されている。天井部の礫や袖部の礫等は検出されず竈の原形を留めていない。袖石等は元位置にはなく竈の南東側に床面より浮いた状態で検出された焼石がこれらに帰属するものであろう。竈は石組構造であったと考えられ、竈燃焼部の両脇には袖石を据え付けたと思われる溝状の窪みが確認できた。竈内の土層観察では第１・２層より灰白を呈する粘土性の土層が確認できたが、これが竈の構築物に関わるものかどうかは不明である。焼土の厚さはは火床面より７cmである。煙道は壁際より直接外に出る形で煙道は確認されていない。竈内より遺物は出土しなかった。

柱穴は検出できなかった。もともと柱穴がない住居址ではないかと考えられる。しかし、住居址からは５基の床下土坑と思われるものが検出できた。土坑のそれぞれの大きさは一定しない。

遺物の出土状況　床下土坑３・４・５から遺物が出土した。床下土坑３からは土師器坏２個体分と同高台付坏が１個体分、黒色土器坏片が１片、小型甕１個体分が出土している。床下土坑４の東側壁際からは鉄滓が出土した。ここからは他に土師器坏１個体分が出土している。床下土坑５は灰掻き穴と考えられ２層に分層できる。第１層は黒色土で1㎜大のローム粒子と炭化物粒子を含み、第２層は茶褐色土で内部に焼土粒子と灰色粘土粒子を含む。出土遺物には土師器坏の破片が４個体分、黒色土器坏の破片10片、同高台付坏が１個体分、灰釉陶器碗破片が１個体分出土している。これらの遺物は、ほとんど第２層中より出土している。

床下土坑以外の住居址内出土遺物は、土師器坏が半完型品で１個体、底部が５個体分、黒色土器坏の破片39片、高台付坏の半完形品が１個体、長胴甕破片１個体分、小型甕が１個体以上、また前述の灰釉陶器皿１個体、灰釉陶器碗が６個体分出土している。

試掘調査の段階で住居址覆土上面から灰釉陶器半完形品１個体、黒色土器高台付坏１個体分が検出されている。　（柳川）



第５図　第１号住居址（1/60）

2. 縄文時代の竪穴住居址

縄文時代の竪穴住居址９が検出された。時期より遺構を見ると縄文時代中期初頭の単純集落として捉えることができ、中期初頭の時期を加味すると遺構の検出数等より見て本遺跡は規模的に割合大きな遺跡と捉えることができよう。

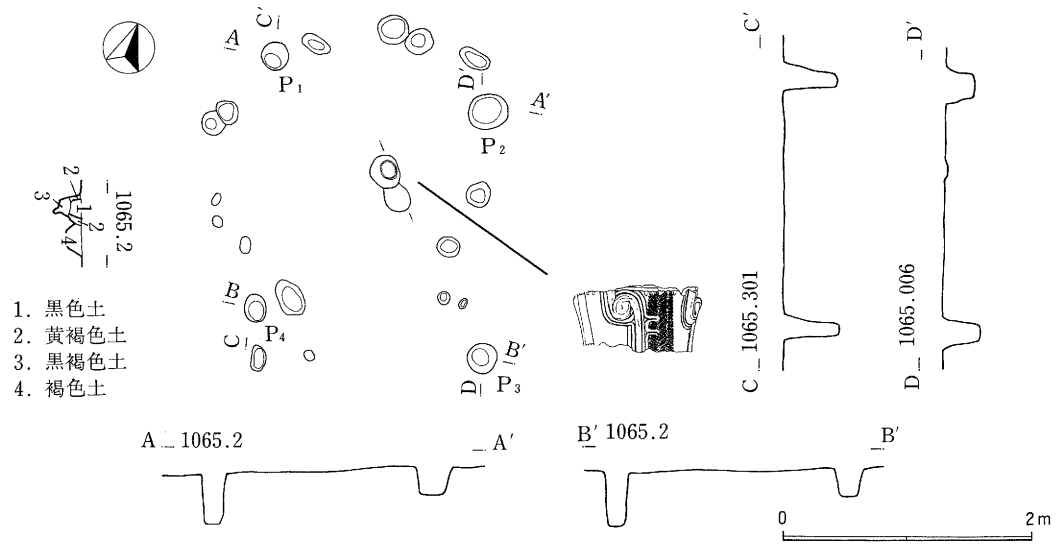
第２号住居址（第６図・図版２）

検出状況　台地のほぼ中央部の最も幅のある部分に位置する住居址で、台地の中心部に近い位置に占地する。調査区の北東側範囲に該当する。遺構確認の段階においては住居の掘り方等が水田造成の際に削平されていることもあって明確に住居址として確認することはできなかったが、埋甕炉の炉体土器と思われる埋設土器が検出されたことより、本址の存在が明確となった。

遺構の構造　住居址全体が開田による削平を受けていたために、平面形プランを把握することはできなかった。

住居址全面が削平を受けているために、壁の掘り方や周溝、床面を検出することはできず、ローム層内に深く掘り込まれた柱穴と、炉体土器と思われる埋設土器が検出されただけである。不規則な小孔が検出されているが、不規則で全周せず一般的な溝状のものとは様相が異なることより周溝とは考えにくい。

主柱穴は配列や深さよりP_1・P_2・P_3・P_4の４本が該当するものと思われる。これらは立替え等は認められない。これらの主柱穴配列は西側に片寄って検出され、主柱穴に囲まれた部分は梯形を呈する。主柱穴の深さは$P_1$40.4cm・$P_2$21.9cm・$P_3$27.4cm・$P_4$43.9cm、平均で33.4cmと割合深いが、その直径は$P_1$22cm・$P_2$32cm・$P_3$25cm・$P_4$33cm、平均で28cm前後と割合貧弱なものであった。



第６図　第２号住居址（1/60）

床は削平を受けており判然としないが、埋甕炉の在り方より見るとローム層を直接床としていたものと思われる。

炉は主柱穴に囲まれた範囲のほぼ中央部に構築されており、その構造は深鉢形土器の胴部を炉体として埋設した埋甕炉である。炉体土器を埋設したと思われる掘り方が重複する形で2ヶ所検出された。掘り方の平面形プランは25cm×27cmと15cm×23cmの円形を呈するもので、炉体土器を埋設しているものの掘り方の方が深い掘り込みを持つ。炉体土器の有無と切り合い関係より南側に位置する掘り方が古いことが確認できた。炉体土器の北東側に若干の焼土粒子と加熱を受けたローム範囲が検出された。

遺物の出土状況　本址に直接関わると思われる遺物は炉体土器に用いられていた深鉢形土器だけである。本址は唯一復原ができた深鉢形土器よりみて中期初頭に帰属しよう。　（守矢）

第3号住居址（第7図・図版3）

検出状況　調査区の東側地番3511の北東隅の土手際より検出された住居址で、第2号住居址の北東側、台地のほぼ中央部よりやや北東側に寄った位置に占地している。住居址の半分以上を開田の際に削り取っており、検出できたのは住居址の一部に過ぎない。

遺構の構造　北西側半分以上を削り取られているために住居址の平面形プランの全てを把握することはできなかったが、検出された南東、南西側の壁等のプランより推定すると、平面形プランはやや南東—北西方向に長い不整円形若しくは楕円形を呈するものと思われる。規模は南東—北西方向が現存しいる部分で2.24m、南西—北東方向で3mで、これらの数値や検出された南東側のプランより本址の規模を推定すると、5m×3mの規模を想定できる。南東—北西方向を長軸と設定した場合長軸方向はN—34°—Wを示す。

壁の立上りはローム上面が削平されていたこともあって不明瞭で低く、そのために検出するのに手間取った。最も高い部分の東側で8.9cm前後である。

壁際よりやや内側に入った部分的に不規則な小孔が検出されているが、周溝は検出されてはいない。壁際の不規則な小孔は一般的な溝状の周溝とは様相が異なり壁や上屋構造に関わるものと考えられる。

主柱穴は配列や深さよりP_1・P_2の2本が該当するものと思われ、他の住居址の例より4本柱となるものであろう。これらは立替え等は認められない。主柱穴の深さは$P_1$48cm・$P_2$45.9cm、平均で46.9cmと割合深いが、その直径は$P_1$31cm・$P_2$37cm、平均で34cm前後と割合貧弱なものであった。住居址中央部範囲にP_3が検出されたが、これは他の柱穴よりも浅く径がやや大きい傾向を示し、黄褐色土により埋め戻されており、埋め土内に黒耀石チップが多量に含まれており、石器生産後の黒耀石チップやゴミを処理するためにP_3を利用したものかともその状態より想像でき得る。

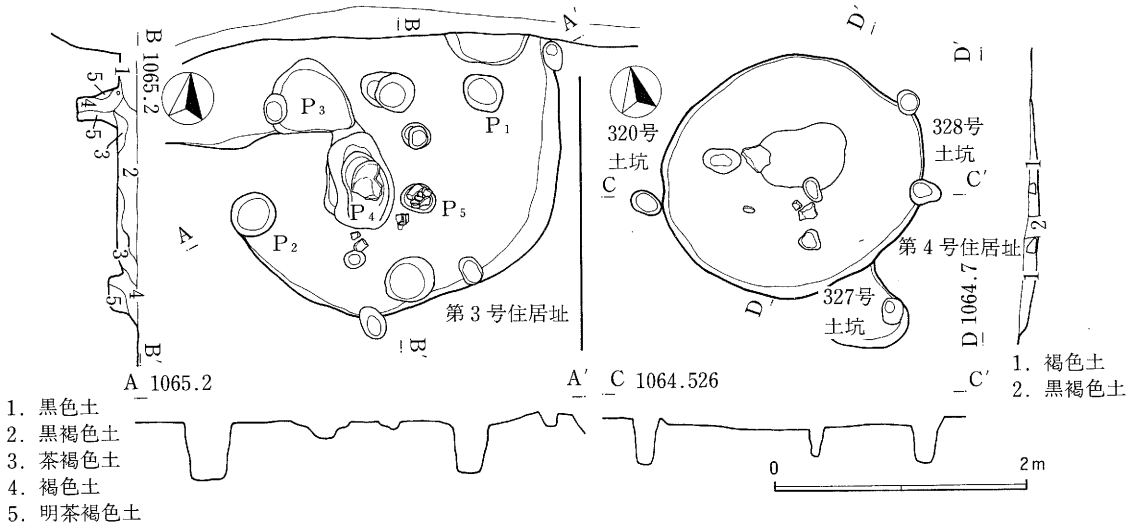
直接ローム面を床としており、全体的に堅緻な傾向を示すが、特に住居中央部に至るにつれ固さを増す傾向が認められ、床は中央部に向かって皿状に緩やかな傾斜を持っている。

炉が構築されていたと思われる部分は開田のために削り取られており検出することはできなかった。

覆土は5層に分層できた。壁際にはローム細粒子を均一に含み締まりの良い褐色土（4層）が堆積していた。この層は柱穴内にも堆積していた。1・2層内には2㎜～3㎜大の炭化物を含有し、この層を中心に遺物が出土する。土層が所謂レンズ状の堆積状況を示すことより本址は自然に埋没していった可能性が強い。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物はそれ程多くはない。覆土第2層を中心に若干の土器片や、石器が出土している。南壁寄りの床面上より11cm浮いた第2層内より中期初頭の深鉢形土器胴部大型破片が（第21図3）が出土している。石器では半割された石皿がP_4を埋めるように裏返され埋設されていた。本址からは黒耀石チップがかなりの量南東側の床上面やP_3の埋土内より検出されている。P_3の埋土を水洗洗浄した結果714点にのぼる黒耀石チップが検出されており石器生産が住居内で行われたことが窺える。遺物ではないがP_5内より8cm大の円礫が7個詰め込まれたような状態で検出されている。黒耀石チップが集中して検出されたことなどを考慮すると、住居址内で黒耀石製石器の製作が行われていたことが窺え、P_3の埋め土内に多量の黒耀石チップが含まれていたことに興味深いものがある。

本址からは中期初頭の土器片1.607kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約2個体分）、黒耀石砕片、剥片114（110.6g）、ピエスエスキーユ3、石鏃1、打製石斧1、石皿2、礫器1、砕片4、剥片1が出土している。（守矢）



第7図　第3号・第4号住居址（1/60）

第4号住居址（第7図・図版3）

検出状況　調査区で最も北東側に位置する住居址で、やや離れるものの第2・3号住居址と一連のグループとなる。検出当初は遺構の直径が小さく、検出プランが不整形なこともあって、大

型の土坑かとも考えられたが、諸々の状況より住居址と捉えたが構造等を加味すると、規模や炉の有無、柱穴配列に住居址と相違がみられ住居址とするよりもむしろ小竪穴や竪穴遺構として取扱った方が妥当ではないか。

遺構の構造　上面が開田による削平を受けているものの、ほぼ全容を把握することができた。検出された北側の壁がやや不鮮明なものの、平面形はやや不整円形な円形を呈する。規模は1.85m×2.11mと一般的な住居址に比べると小規模で、人間が3名も入れば一杯となってしまうような狭いものである。平面形プランより見るとやや南西一北東方向に長く、これを長軸とすると長軸方向はS—72°—Wとなる。

壁の立上りは北側は不明瞭であるが、南側は明瞭である。それによると壁の立上りは割合緩やかで断面形は皿状を呈する。壁の高さは最も高い部分の南側で8cmを測る。

壁際に周溝、小孔は検出されてはいない。

本址周辺や内部に径は小さいものの深い柱穴状の穴が検出され、これが主柱穴かとも思われたが配列に規則性が認められない点や、内部に検出された穴が覆土を切って掘り込まれている点などを考慮すると、これらは主柱穴とはなり得ない。

直接ローム面を床としており全体的に割合硬質であるが、小さな凹凸を呈している。中央部の46m×63mの不正円形の範囲が浅い皿状の凹みとなっているために床は中央部に向かって皿状に緩やかな傾斜を持っている。

炉は構築されていない。

覆土は褐色土層の単一層である。この覆土を切って黒褐色土が垂下しておりこの土層は本址中央部に検出された穴に関わるものと思われる。

遺物の出土状況　出土遺物は少量で、覆土より中期初頭土器片0.19kg、黒耀石砕片・剝片（2.9kg）5、凹石1が出土している。本址は検出された土器より中期初頭に帰属しよう。（守矢）

第5号住居址（第8図・図版4）

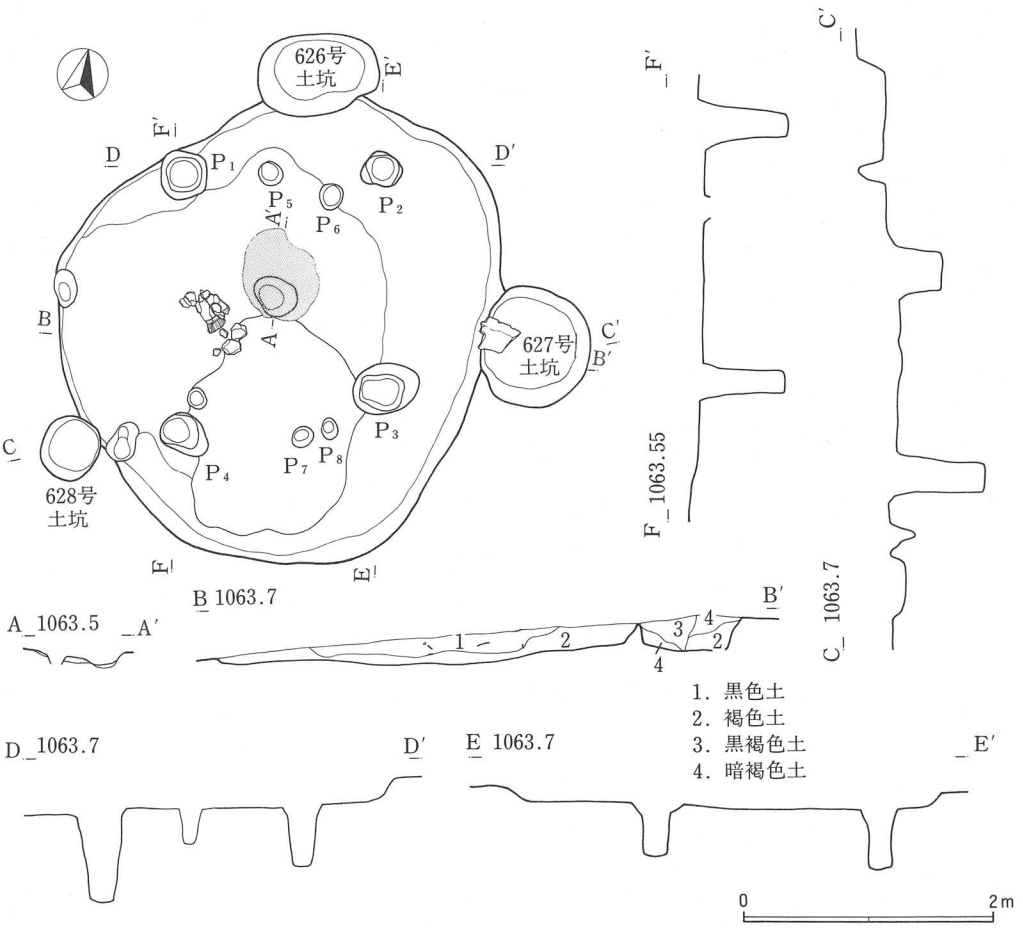
検出状況　本址は試掘の段階で確認されていたものである。調査区のほぼ中央よりやや北西に寄った位置に占地する。東側を627号土坑と北側を626号土坑と重複しているが、ほぼ完全に住居址の平面形プランを把握することができた。

遺構の構造　検出された平面形プランより見るとやや南東一北西方向につぶれる不整円形を呈する。規模は長軸3.67m×短軸3.58mで規模的には一般的な住居址である。南北方向に長軸を持ち長軸方向はN—14°—Wを示す。

壁の立上りは北、東側が最も明瞭であるが、西側は地形が傾斜を持つため低く、そのために検出するのに手間取った。東側で28.5cm、南側で13.5cm、西側で2.9cm、北側で15.1cmを測る。壁の掘り方は割合直立するが、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

周溝や壁際を巡る小孔は検出されていない。

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、P_3、P_4の4本が該当するものと思われる。これらには大



第8図　第5号住居址（1/60）

きな立替えは認められない。これらの柱穴は壁際に寄った位置に検出される。掘り方はしっかりしているが、中段に段を有し開口部がやや広がる形のもので、断面形がラッパ状に類似する特徴的な掘り方をしており、径に比較して深く掘り上げるのに苦労した。主柱穴の補助と思われる柱穴がP_5、P_6、P_7、P_8の4ヶ所認められるが、いずれも主柱穴に囲まれた方形の範囲周辺に位置しており、配列にややばらつきのあるものの規則性を若干有しているよう。特にP_5、P_7は主柱穴P_1－P_2間、P_3－P_4間のほぼ中央に位置することにより棟に関わる柱穴の可能性が高い。また、住居址中央部から西側にかけて平面形プランが不整形な数箇所の深い柱穴が検出されたが、これらは配列が不規則な点や平面形プランが不整形なこともあり、本址の柱構造に関わっていたものとは考えられず、柱穴内の覆土の状況等より根の攪乱かと思われる。主柱穴の深さは$P_1$66.5cm、$P_2$47.9cm、$P_3$44.6cm、$P_4$68.6cmで平均で56.9cmと概して深いが、東側のP_2、P_3が西側に位置する柱穴に比較して浅めであった。

直接ローム面を床としているために面的に硬く明瞭であるがやや凹凸を呈する。床は中央より

南に寄った位置の1.42m×1.75m の範囲が浅い皿状の凹みとなっており、この部分が若干他の部分より軟弱な傾向が窺える。床は炉に向かって皿状に緩やかな傾斜を持っている。

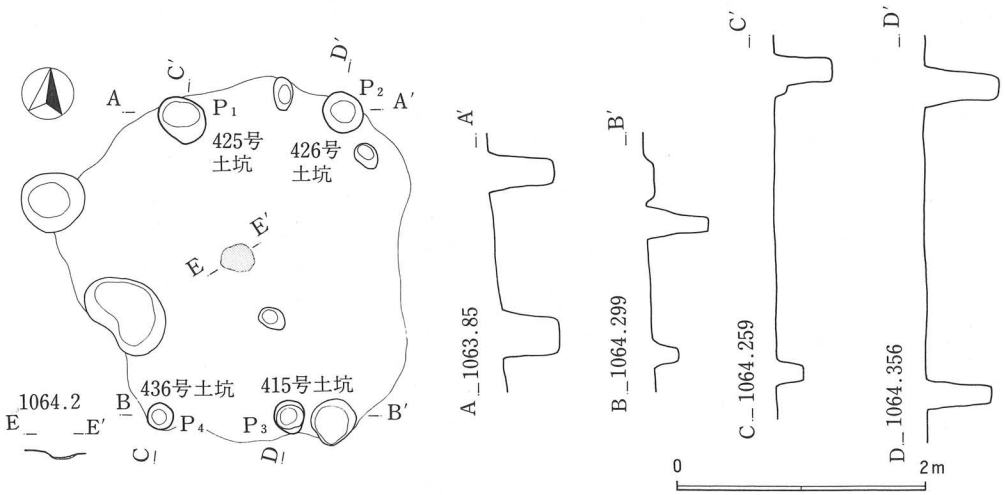
炉と思われる焼土の範囲が主柱穴に囲まれた範囲の中央部よりP_1側に寄った位置に１ヶ所検出された。焼土の範囲は61cm×75cmの不整形でその深さは５cmを測る。炉体土器の抜取り痕などは検出されておらず、炉の構造は地床炉であったと思われる。

覆土は２層に分層できた。住居址のほぼ中央部にローム粒子を含まない黒色土（１層）が堆積していた。土層の状況は締まりが良く炭化物粒子を若干含有し、本層内に土器片や石器片・礫が大量に廃棄されたような状況で検出されている。床上面には色調がやや黄色味の強い褐色土（２層）が堆積していた。この層は１㎜～２㎜大のローム粒子を割合含有しており、床面に至るにつれて締まり方が増し、やや粘性を帯びている。本層は１層のように遺物の含有が少量で若干の土器小片と黒耀石剥片が検出されただけである。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は１層を中心に土器片11.979kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約10個体分）が検出されており、本遺跡の中でその量は最も多い。しかし、土器片は量的には多いものの一括土器として復元でき得る個体は１個体だけであり、土器片を個体別にに見た場合かなりの個体が破片としてバラバラの状態で住居址覆土第１層内に廃棄されたことが窺えた。これらの土器片に混在して石器や黒耀石剥片が検出されている。住居址ほぼ中央部の床面よりやや浮いた位置に中期初頭の深鉢形土器（第24図19）が横倒した状態でつぶれて出土している。その他に黒耀石砕片・剥片62（210.5ｇ）、ピエスエスキーユ８、ドリル３、打製石斧９、磨製石斧１、横刃型石器２、礫器１、敲打器１、砕片11、剥片２が検出されている。本址は唯一復原ができた深鉢形土器よりみて中期初頭に帰属しよう。　（守矢）

第６号住居址（第９図・図版３）

検出状況　調査区のほぼ中央部に若干の焼土が確認され、この周辺を精査した結果焼土を中心



第９図　第６号住居址（1/60）

に主柱穴と思われる4ヶ所の柱穴が検出され本址の存在が明確となった。

遺構の構造　住居址全面が激しい攪乱を受けているため、平面プラン等を確認することはできず、規模や長軸方向などは不明である。

直接ローム面を床としており、床面の残存している部分は周囲のローム面よりもやや硬質な傾向を示し凹凸が見られる。

覆土の状態を見ると、北側は、ローム粒子・ロームブロック・炭化物・焼土粒子を少量含み、南側はローム粒子とロームブロックを少量含むが、炭化物は見られない。

主柱穴はその配列や規模等より土坑番号を付した第425（P_1）・427（P_2）・415（P_3）・436号（P_4）の4本と考えられる。いづれも土坑の口径は狭く、$P_1$45.1cm・$P_2$59.4cm・$P_3$51.2cm・$P_4$21.1cmと深いものである。このうち、第415号土坑の覆土には焼土が微量ではあるが検出された。また、本住居址内の範囲には第414・416・424・426・428号土坑が検出されているが、これらの中にはその配置等より積極的に支柱穴と思われるものはなく、むしろ第427・426・428号土坑などはその状況より木の根による攪乱の可能性が高い。

4本の主柱穴に囲まれた中央部よりやや東に寄った位置に径約20cmほどの不整円形を呈する範囲に焼土を検出した。焼土の厚さは2cmである。おそらく地床炉であろうと思われるが、貧弱なものである。

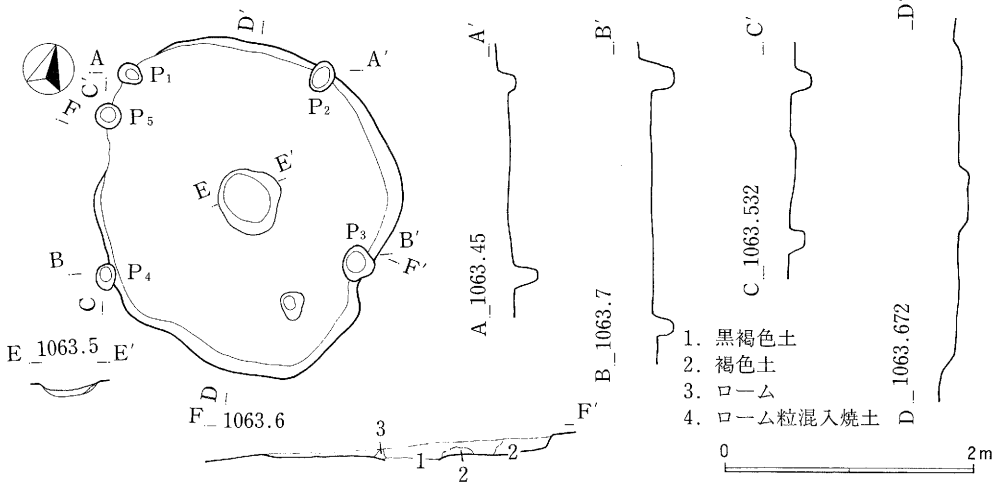
遺物の出土状況　本址の時期を決定付けるような遺物検出はなされてはいないが、主柱穴配列や地床炉のあり方が今回検出された他の住居址と類似することより、本址は中期初頭に帰属するものと思われる。（柳川）

第7号住居址（第10図・図版5）

検出状況　本址は台地のほぼ中央部の最も幅のある部分よりやや西側に寄った位置に占地し、第5号住居址の北側に隣接する住居址である。第5号住居址の平面プランを確認する際にその存在が明確になったものである。住居址の全体形が不明なものが多い中において第4号住居址・第5号住居址と本址が唯一全体を把握できたものである。第5号住居址の80cm北側の近接する位置に構築されているものの重複している部分はなく、また、土坑等の他の遺構との重複もなく全容を把握することができた。しかし、地形が西側に傾斜する関係より西側壁の一部が低く判然としない部分がある。

遺構の構造　平面形はやや東西方向に長い不整円形を呈し、南東側の一部がやや張り出す形を呈する。規模は2.48m×2.82mで、第5号住居址などに比べると割合小型の規模である。南北方向に長軸を持ち長軸方向はN－30°－Wを示す。

壁の立上りは東、北、南側は明瞭であるが、地形が西側に傾斜することより西側は低く、そのために検出するのに手間取り判然としない部分がある。最も壁高が高い部分の東側で18.3cm前後を測る。壁の立上りは最も壁が明瞭であった東側においては直に近い立上りを有するものの、北・南側においては緩やかな傾向を示し、壁際が第5号住居址と同様に丸みを帯びることが観察で



第10図　第７号住居址（1/60）

きた。周溝や壁際を巡る小孔は検出されていない。

主柱穴は配列や深さよりＰ₁、Ｐ₂、Ｐ₃、Ｐ₄、Ｐ₅の５本が該当するものと思われるが、Ｐ₃、Ｐ₄が並列した位置に構築されていることなどを考慮すると、基本的にはＰ₃、Ｐ₄を一組と考え主柱穴配列はＰ₁、Ｐ₂、Ｐ₃、Ｐ₄、Ｐ₅の変則的な４本柱となり、柱配列や地形的な面を考慮するとＰ₄、Ｐ₅の部分が出入口に関わる可能性が強い。主柱穴は径23.8cm、深さ16cmを平均とし、その数値は他の住居址に比較して浅く小規模なものである。これらの主柱穴の位置は他の住居址とは異なり壁際若しくは壁と重なるように構築されており、主柱穴配列より考えると他の住居址と上屋構造に相違があったことが考えられ、住居址の規模が小さい点なども考慮すると、より居住空間を有効に利用したものと理解できるのではないか。尚、これ等の主柱穴には立替え等による重複は見られなかった。

ローム面を直接床としており、出入口部と思われる西側の一部を除いて堅緻でほぼ水平に構築されている。若干ではあるが床は中央部に向かい皿状に傾斜する傾向が見られる。

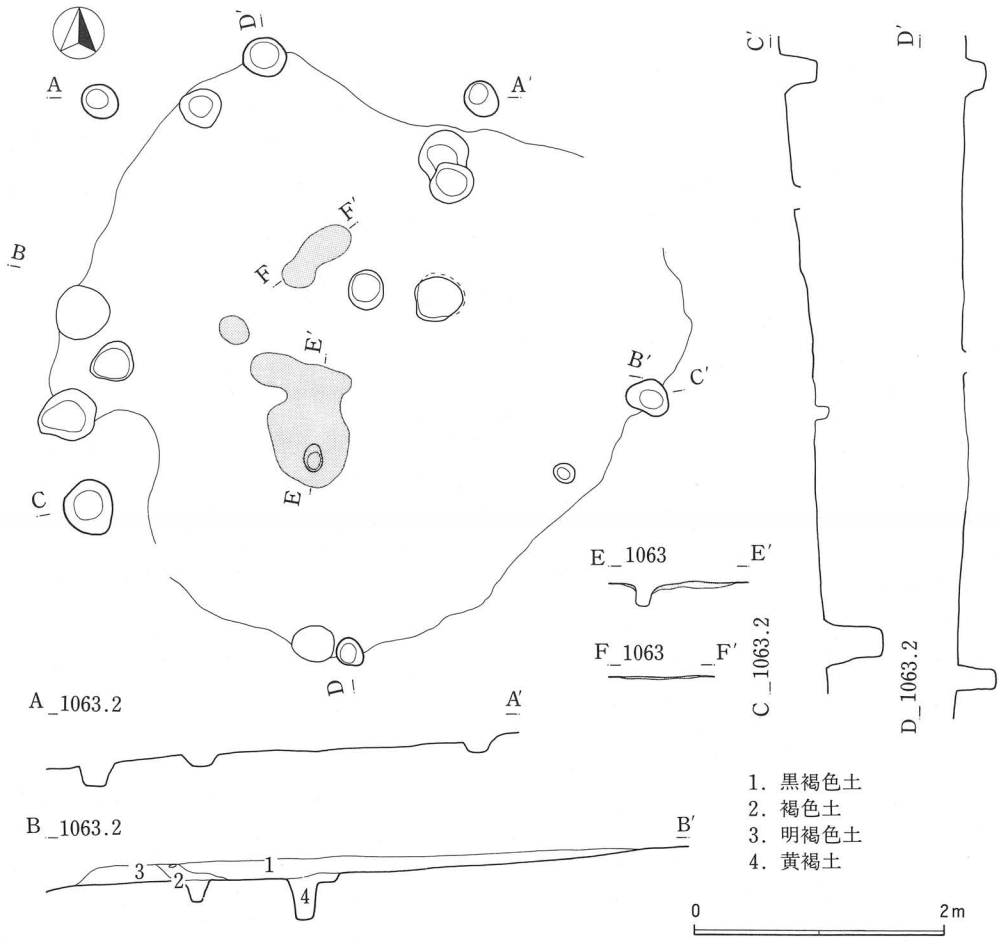
地床炉と思われる焼土の範囲が住居址のほぼ中央部にの位置に１ヶ所検出された。焼土の範囲は33cm×42cmの不整円形を呈し、焼土の堆積は３cmを測る。焼土周辺の65cm×53cmの範囲に深さ9.1cmの浅い皿状の掘り方を持っている。尚、焼土内に炉体土器を抜き取った痕跡や焼土周縁に石囲い等の施設を設けた痕跡は検出されなかった。

覆土は２層に分層できた。壁際には１㎜～２㎜大のローム粒子を多量に含有しややボロボロする褐色土（２層）が堆積し、住居址中央部範囲にソフトな感触を持つ黒褐色土（１層）が堆積していた。本層内には２㎜大のローム粒子、１㎜大の炭化物粒子を若干含有しており、割合まとまった範囲に土器片が廃棄されたような状況で検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は、住居址覆土第１層を中心に土器片や、石器・礫が南東側範囲より出土している。これらで一括性の強いものはなく、破片が散在する状況を示してい

た。本址から出土した遺物は中期初頭の土器片1.957kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約２個体分）黒耀石砕片・剥片12（41.1ｇ）、ピエスエスキーユ３、石鏃１、打製石斧１、剥片１が検出されている。本址は検出された土器よりみて中期初頭に帰属する。(守矢)

第８号住居址（第11図・図版６）



第11図　第８号住居址（1/60）

検出状況　試掘調査の段階において本址の存在は判明していたが、掘り方等が不明瞭で平面プランは判然としていなかった。本址は他の住居址とは異なり東側に第９号住居址、西側に第10号住居址と重複関係を持つ。そのためか住居址の確認には手間取った。本址は調査区の西側に寄った位置に占地する。

遺構の構造　南西隅を第10号住居址と重複しており、住居址の掘り方が不鮮明なこともあり、平面プランの全てを把握することはできなかったが、検出された北、東、南等の掘り方より推定すると、平面プランはやや東西方向に長い不整円形を呈するものと思われる。規模は主柱穴のあ

り方や検出された不鮮明な壁より推定すると4.93m×5.1mのやや大型の住居址が想定できる。南北方向に長軸を持ち、正確な長軸方向は不明であるがP_2・P_5方向を棟軸と想定すると、N—9°—Wに設定できる。

住居址が西側に傾斜する斜面上に位置するために、壁の掘り方は不明瞭であった。東側・北側・南側は低い壁が確認されているが、最も高い部分の東側で1㎝前後を測る。壁の立上りと床際の境は判然とせず断面は皿状を呈する。

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、P_3、P_4、P_5、P_6の6本が該当するものと思われる。主柱穴の深さは平均で25.1㎝と割合浅く貧弱なものであった。

床は炉を中心とした部分が硬い傾向を示し、その範囲は4.72m×4.96mを測りこの範囲はやや凹凸が認められた。

地床炉と思われる焼土の範囲が中央部と主軸線上中央より南に寄った位置に2ヶ所検出された。焼土の範囲は27㎝×65㎝の不整楕円形を呈するもの（F_1）と、65㎝×98㎝の不整形を呈するもの（F_2）、24㎝×26㎝の不整円形を呈する焼土（F_3）が確認された。

覆土は3層に分層できた。西側には1㎜～2㎜大のローム粒子を含有する締まりの少ないソフトな感触を持つ明褐色土（3層）が堆積し、住居址中央部範囲にはやや粘性を持ち、内部に1㎜～2㎜大のローム粒子、炭化物粒子を含有する黒褐色土（1層）が堆積していた。本層内の住居址床面上10㎝前後の範囲に遺物が廃棄されていた。

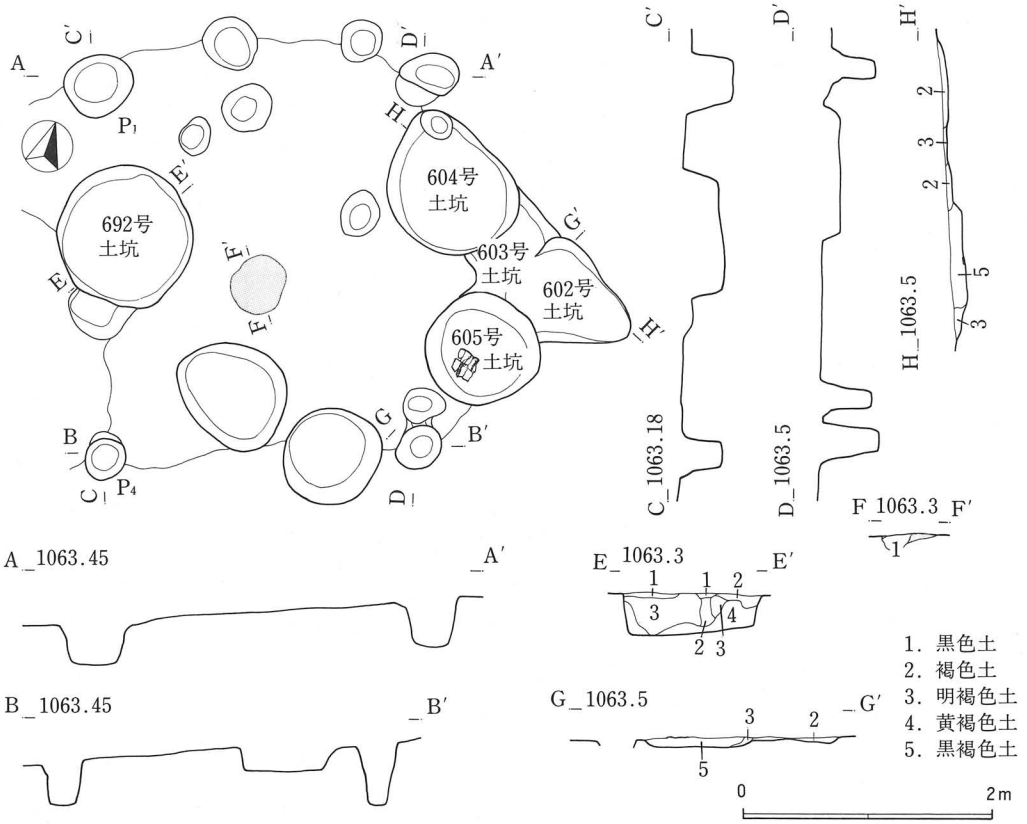
遺物の出土状況　出土遺物は　層内の床面より浮いた位置に、廃棄されたような状態で雑然と土器片・石器が検出された。本址から出土した遺物は中期初頭の土器片3.866kg（口径19㎝、器高25㎝、重量1.25kgの深鉢に換算して約4個体分）でその量は第5号住居址に次ぐ。本址から検出された土器片の内復元可能なものは第23図69だけでその他の破片は細片が主体を占め接合関係をもつものは稀少であった。この他に黒曜石砕片・剝片29（113.8g）、ピエスエスキーユ2、打製石斧4、凹石2、凹石・磨石1、石匙1、礫器1、砕片4、剝片1が検出されている。本址は唯一復原ができた深鉢形土器よりみて中期初頭に帰属しよう。　（守矢）

第9号住居址（第12図・図版6）

検出状況　調査区の中央部より西側に占地している住居址である。第8号住居址の検出に伴って焼土範囲が東側に検出され本址の存在が判明した。本址内には第605号・675号・692号土坑等が重複し、西側に第8号住居址と重複する関係や掘り方が明確でなかったこともあり、住居址の規模等を把握することはできず、主柱穴と焼土の存在より規模等を推定した。

遺構の構造　本址の掘り方は基本層序のⅤ層内に浅く掘り込まれていたためか不明瞭で、西側を第8号住居址と重複しているため平面プランを把握することはできず、検出された焼土・主柱穴より住居址として確認できた。主柱穴配列より推定すると、平面プラン、規模は第5・8号住居址に類似するものと考えられる。

壁の立上りは浅い掘り方のためか検出することはできなかった。



第12図　第９号住居址（1/60）

主柱穴は配列や深さよりＰ１（第694号土坑）、Ｐ２（第708号土坑）、Ｐ３（第607号土坑）、Ｐ４（第690号土坑）の４本が該当するものと思われる。これらに囲まれた範囲は東側が歪む梯形となる。これらの内Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３に重複が認められ、特に東側に位置する主柱穴に偏る傾向にある。主柱穴の重複関係から見ると２回に亘る立替え行われたものと考えられる。

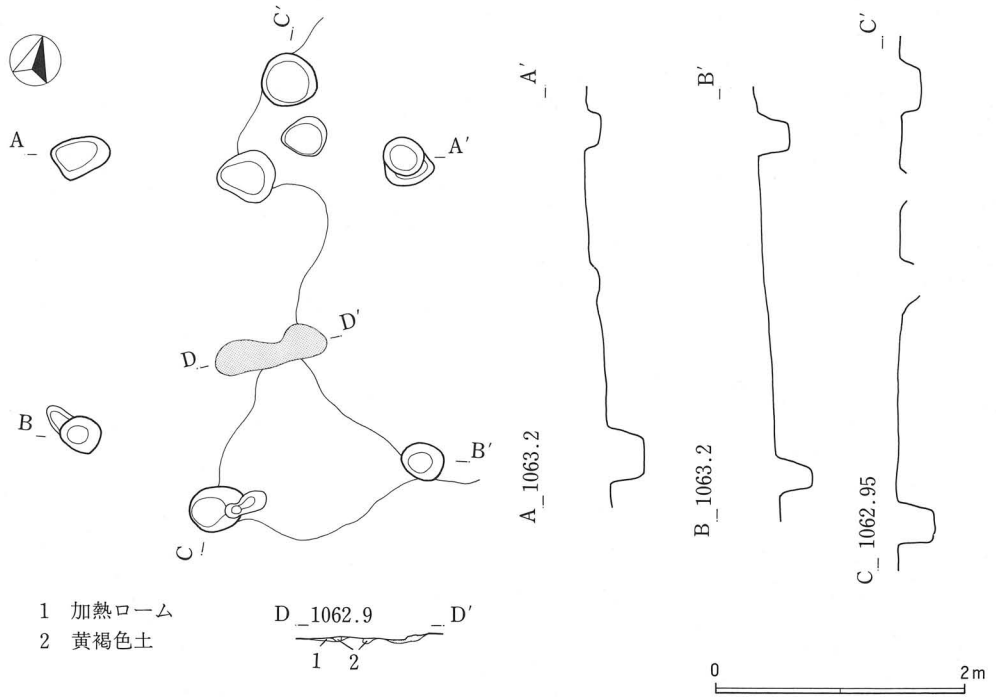
床は中央より西に寄った位置に1.5m×1.1m の範囲に固い貼り床が認められた。床の大部分が軟弱な傾向を呈したが、住居中央部西寄りでは、４ m×4.5m の範囲に凹凸を呈するが硬く締まった床が検出されている。床は中央部に向かって皿状に緩やかな傾斜を持っている。

地床炉と思われる焼土の範囲が主軸線上中央より北に寄った位置に３ヶ所検出された。焼土の範囲は60㎝×36㎝の楕円形を呈するもの１ヶ所と、23㎝×15㎝の不整形を呈するもの３ヶ所が確認された。

遺物の出土状況　出土遺物は少量で、中期初頭土器片30ｇが検出されている。　（守矢）

第10号住居址（第13図・図版６）

検出状況　調査区の中央部より西側に寄った位置に立地し、東側を第８号住居址と重複する。検出当初は住居址の堀り方が不明確でその存在は明確ではなかったが、焼土が検出されたことよ



第13図　第10号住居址（1/60）

り住居址であることが判明した。

遺構の構造　北東側を第８号住居址と重複しており、また、住居址の掘り方も検出できなかったことより、平面プランを把握することはできなかった。検出された主柱穴等の範囲を考慮すると、第５号住居址くらいの規模が想定できようか。

主柱穴は配列や深さよりＰ$_1$、Ｐ$_2$、Ｐ$_3$、Ｐ$_4$、Ｐ$_5$、Ｐ$_6$の６本が該当するものと思われ、Ｐ$_3$に重複がある。この柱穴は２回の立替えが認められる。

主柱穴の深さは平均で28.5cmと割合浅く、その直径も様々で割合貧弱なものであった。住居址の軸線方向は不明確な部分であるがＰ$_2$、Ｐ$_5$方向を長軸と想定すると、Ｎ－８°－Ｗを測る。

床は地形に沿って流出しており全面は検出されなかったが、炉の部分に若干硬く締まった部分が認められた。

地床炉と思われる焼土の範囲が長軸線上に直行する位置に１ヶ所検出された。焼土の範囲は27cm×90cmの上面観が瓢箪形を呈するもので、厚さは３cmを測る。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は少量で、住居址覆土を中心に土器片が13ｇ出土している。これらの土器よりみて本址は中期初頭に帰属しよう。　（守矢）

3. 縄文時代の土坑と他の遺構

今回の調査において検出された遺構の中心をなすものは土坑であり、番号を付したもので735を数える。覆土中より出土した遺物より見ると、縄文時代中期初頭に帰属するものと思われ、住居址群と組み合わさり「稗田頭C縄文ムラ」を構成している。その他にも所謂方形柱穴列やロームマウンドなども検出されている。

土坑（第14～20図、図版7・8・9・10）

今回の調査により得られた土坑の全てについては挙げることは枚挙にいとまがないが、特徴的なものについてその概略について記述する。

土坑の規定　土坑は基本的には地表面に掘り込まれた「穴」を指し、所謂土壙やピット、小竪穴、木の根による攪乱孔等を全て総称しており人為・自然を問わず遺構確認の段階において確認面下に掘り込みが確認できた「穴」全てについて土坑番号を付し土坑として取扱った。そのために土坑の数は多くなり735の番号を付けるに至った。本来ならば「穴」の意味合いに応じてその名称も墓壙や貯蔵穴、ゴミ穴等に区分して所見・報告しなければならないと考えられるが、今回得られたデーターからはこれらを明瞭に区分するだけの情報を得ることはできてはいない。そこで土坑＝「穴」と単純に幅広く捉えて考えたい。

土坑の分類　土坑を分類する際にその大きな基準となるものは坑の持つ規模や構造（掘り方等）によるところが大きい。尚、規模特に上面形や深さの細かな数値については検出面の状況により異なりがあり、そのため概略的なまとめ方が適当であると思われる。また規模や構造の要件に土層の堆積状態や遺物の出土状況が加わる。特に坑の掘り方は土坑の役割に大きな影響を持っていたものと考えられ、細かな観察を必要とする要件である。これらの事柄を踏まえて代表的な群の土坑を記述する。

第Ⅰ群　　平面プランが円形を基本とする土坑群で、断面形により4類に分類が可能である。

第Ⅰ群1類（15・21・40・350・395・502・667他）　断面形が所謂巾着型・フラスコ型を呈する土坑で、構造的にはしっかりした掘り方、深さを有する。断面形の状況により細分が可能であるが、口径が底径よりも小さく口の窄むという基本的な構造を中心に考え、一括して取扱うこととする。本群の土層状況は基本的には数層に分層される。特に壁際に壁が崩落して形成されたと思われる土層が堆積しており、自然堆積を思わせる状況のものが主体を占める。土坑内に一括土器や礫を埋納したような状況の遺物の出土状態を示すものは少なく、坑底から上がった位置に堆積する土層上に破片がバラバラの状態で検出されるものがある。

第Ⅰ群2類（38・54・179他）　断面形が樽状を呈する土坑で、1類と同様にしっかりした掘り方、深さを有する。土層の堆積状況や遺物の出土状況は1類と同様な傾向にある。

第Ⅰ群3類　直に近い形で掘り込まれているもので、坑の径が小さくピット・柱穴状土坑と総称される一群で、土層の堆積状況や掘り方等を観察すると、木の根等の攪乱孔も本類の範疇に含まれている。本類から一括性のある土器等の検出はない。

第Ⅰ群4類（13・50・174他）　1～3類のような深さを有する土坑ではなく、断面形が盥状を呈する。平面プランも1・2類が割合歪みのない円形を呈するのに対して本類はやや不整形なものも含まれる傾向にある。断面についても1・2類の壁の立上りとはやや異なりが見られ、坑底と壁際が明瞭とならず丸みを持つもの、ダラダラと立ち上がるものなどが見られる。坑底についても1・2類に帰属するものは割合平坦な底を持っているのに対して、本類に帰属するものは凹凸を示し、その状況も軟弱な傾向を示すものが含まれる。掘り方もローム漸移層までしか掘り込まれておらず、そのため深さが浅いものがかなり含まれている。平面プラン、坑の構築方法を見た場合1・2類などと比較すると貧弱な傾向を示す。尚、本類の中にも構築方法が2類に類似するものが見られ、これらについては細分するべきかもしれない。本類の土層堆積状態を大きく分類すると、① ロームブロック等を含む黄褐色土などにより埋め戻されたような土層状況を示すもの、② 土層が分層できない単一層のもの、③ 壁際に崩落したような状況を示す所謂三角堆土を持つもの、④ 土坑中央部に黒色土等がレンズ状の堆積をなすものが認められた。遺物の出土状況を見た場合本類には様々な様相を示すものが認められた。大きく分類するとａ 一括土器が横倒や埋置されたような状態で検出されているもの、ｂ 一括性のない数個体の土器片を礫などと一緒に廃棄するもの、ｃ 石匙や打製石斧等の石器を出土するもの、ｄ 数個の礫を含む所謂集石土坑などが認められた。

第Ⅱ群　第Ⅰ群の平面プランが円を基調としていたのに対して、本群は楕円形若しくは不整形を基調にしている。第Ⅰ群には断面形に様々なバリエーションが認められたが、本群は基本的には第Ⅰ群4類と同様な傾向を示している。断面形により2類に分類できる。

第Ⅱ群1類（196・246・444他）　壁の立上りが明瞭で断面形が盥状を呈する土坑で、第Ⅱ群の他の類に比較してしっかりした構造を持つ。土層の堆積状況、遺物の出土状況は第Ⅰ群4類の土坑群と類似する。

第Ⅱ群2類（187・418・557・654他）　壁の立上りが不明瞭で断面形は皿状等を呈する。平面形は不規則で検出段階においてその存在が不明確なものが主体を占めた。本類に帰属する土坑内には坑底が軟弱で凹凸が激しく木の根の攪乱と見紛うものがかなり含まれている。土層の状況は②の状況を示すものが主体をなし、若干③の状況を呈するものも認められたが、量的にはそれ程多くはない。遺物を伴っている例は稀少であったが、基本的には第Ⅰ群4類と同様な傾向にある。

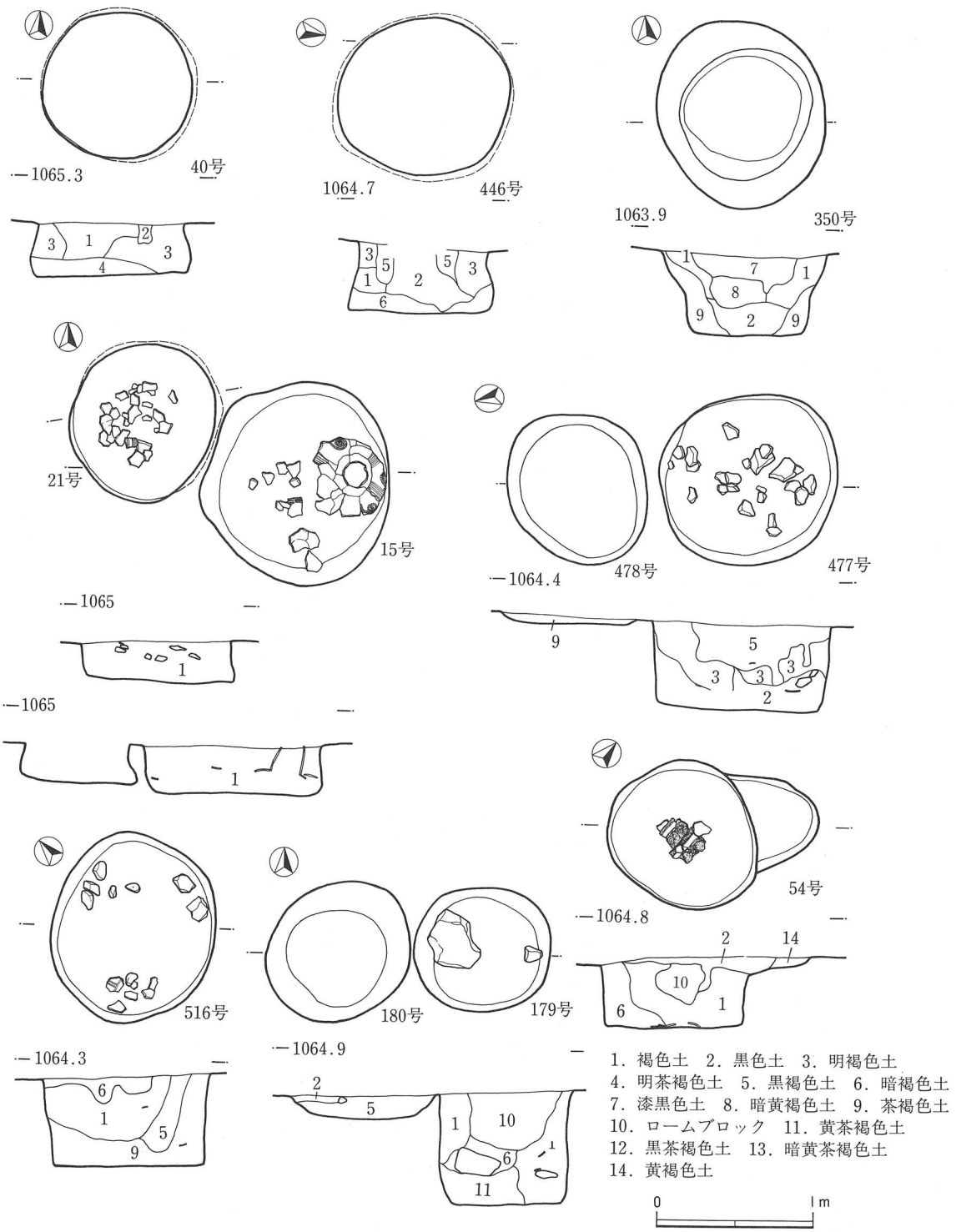
土坑の遺物の出土状況　土坑形状における遺物の出土状況の傾向について細分したが、土器の場合基本的には一括性のあるものが遺存するものと、一括性のないものが散在するものが認められ、今回の調査で得られた土坑の中で、一括性を持つ土器が埋置されたような状況―（A）で検出されている土坑は5基認められている。その状態には人為的に埋置したようなもの（第15号土坑）、横倒したような状況で遺存するもの（第183号土坑等）が見られる。特に第15号土坑の場合胴部下半を人為的に取り去り、坑底よりやや浮いた部分に逆位にまるで被せたように埋置したものもがある。これに対応するように一括性のない数個体分の土器片が礫などと一緒に遺存してい

るもの—（B）が7基ある（第21号土坑他）。これらの遺物の状況は第21号土坑のような規則性を持たない雑然と廃棄されたような状況を示すものと、第246号土坑のように壁際を囲むように土器片を人為的に立て掛けたような状況のものがある。これらの状況は土器片を礫に置き換えると集石土坑に共通するものがあり、本遺跡が容易に礫を得ることができない地域である点を考慮すると興味深いものがある。石皿が埋置されたような状態で検出されているもの—（C）が2基見られた。第13号土坑の場合完形石皿が逆位で、第449号土坑は半割された石皿が正位で他に縦形石匙1、打製石斧1が検出されており、土坑の用途を窺うには興味深い資料である。また、重複関係を有せず位置の離れた第179号土坑と第405号土坑から接合関係を有しないものの同一個体の土器片が得られており、土坑の同時性を考える上に興味深い資料である。今回検出された土坑よりの土器は全て中期初頭に帰属するものである。以上のように土坑内の遺物の出土状況について概要を記述してきたが、土坑の用途や性格を考察するためには遺物の状況を詳細に分析する必要があるが、今回は時間的な制約等もあり突っ込んだ分析には至ってはいない。今後再度検討する必要があろう。

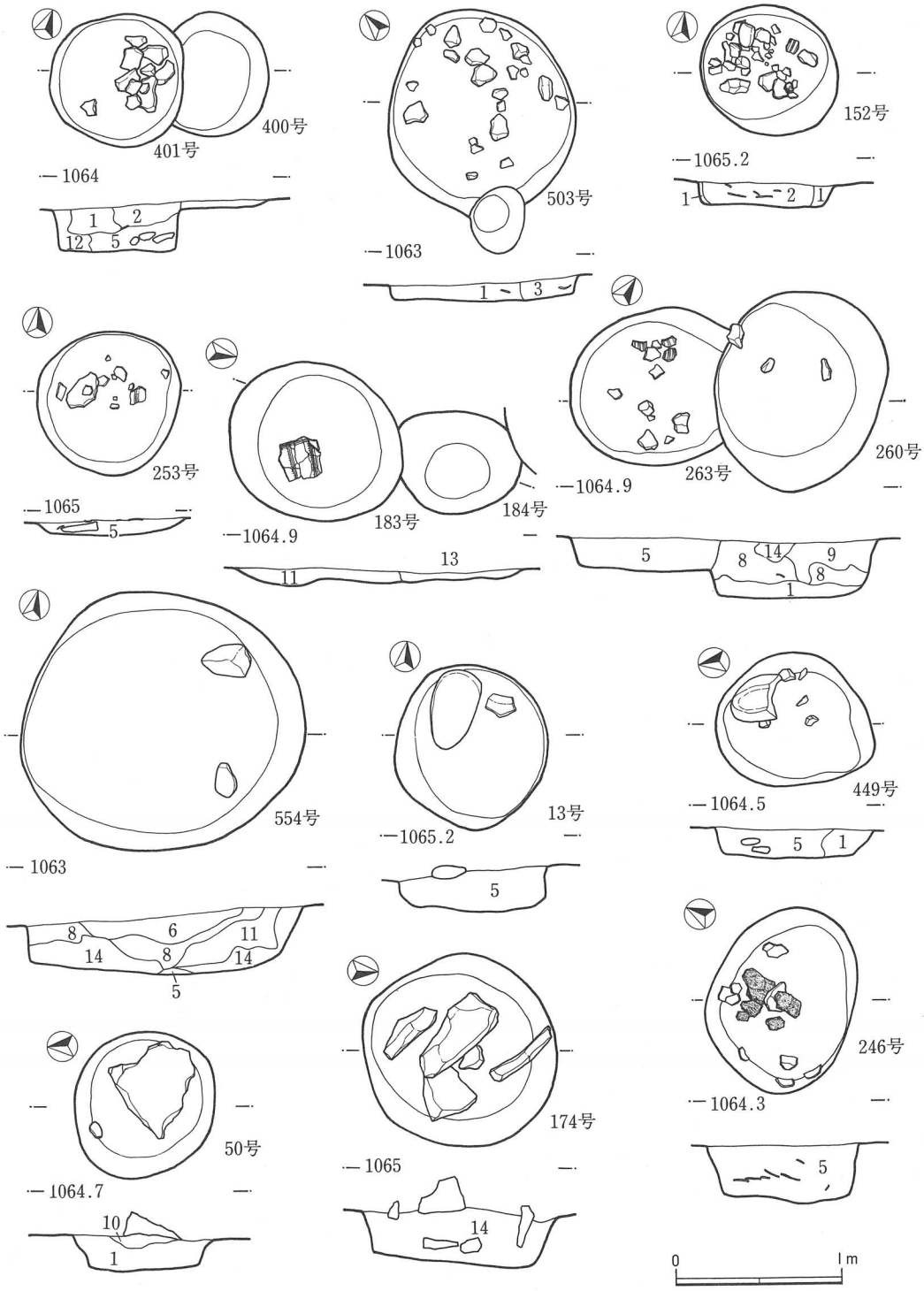
土坑の重複関係と分布　今回の調査により得られた土坑は735基を数え、その量は重層しない単一の遺跡での量としては市域において最も多い。これらが約7,000㎡の空間に密集しており、その様相は月面のクレーターを彷彿させる。しかし、これらの土坑の重複関係を見た場合、度重なる構築のために著しく重複し、完全に土坑が重なってしまったものはなく、数cmしか離れず近接するもの—ア、土坑の隅約1/3が重複するもの—イ、土坑の約1/2が重複し平面プランが眼鏡状を呈するもの—ウ、重複関係を持たない単独のもの—エなどが認められ、これらを量的に見ると約1/3の重複（イ）・近接関係（ア）・単独（エ）・約1/2が重複（ウ）の順となっており、（エ）が全体の約55%を占めていることに特徴を持っており、多くが重複関係を有しない点を考慮すると、時間を隔てて土坑が構築されたのではなく、隣接する土坑が機能終了または埋没しきらない内に構築された結果このような状況が生じたものと思われ、土坑の用途を考える上に重要な要素となろう。興味深い例として第15号土坑と第21号土坑のあり方がある。両者の構造は第Ⅰ群1類を示し規模等は同等であり、これが僅か8cmの近接距離に構築されており、両者の並ぶ平面観は横倒しの8字形を呈している。接する壁の状況を観察すると、第21号土坑の壁が第15号土坑の壁を若干切っていることが観察され、旧 第15号土坑→新 21号土坑の重複関係が把握されているが、通常時間差を有する遺構は、ある程度の重なりを持った重複関係を持つものが一般的であるのに対して、今回のような例は土坑の機能終了と新設の時間差を示しているように思われる。

検出された土坑の分布を巨視的に見ると、土坑は大きく8ブロック位の単位に分割することができる。これらのブロックの中には、土坑の分布が環状を呈するものもあるが、これはあくまでも土坑の構造等を考慮せず、単に分布状態において見た結果である。

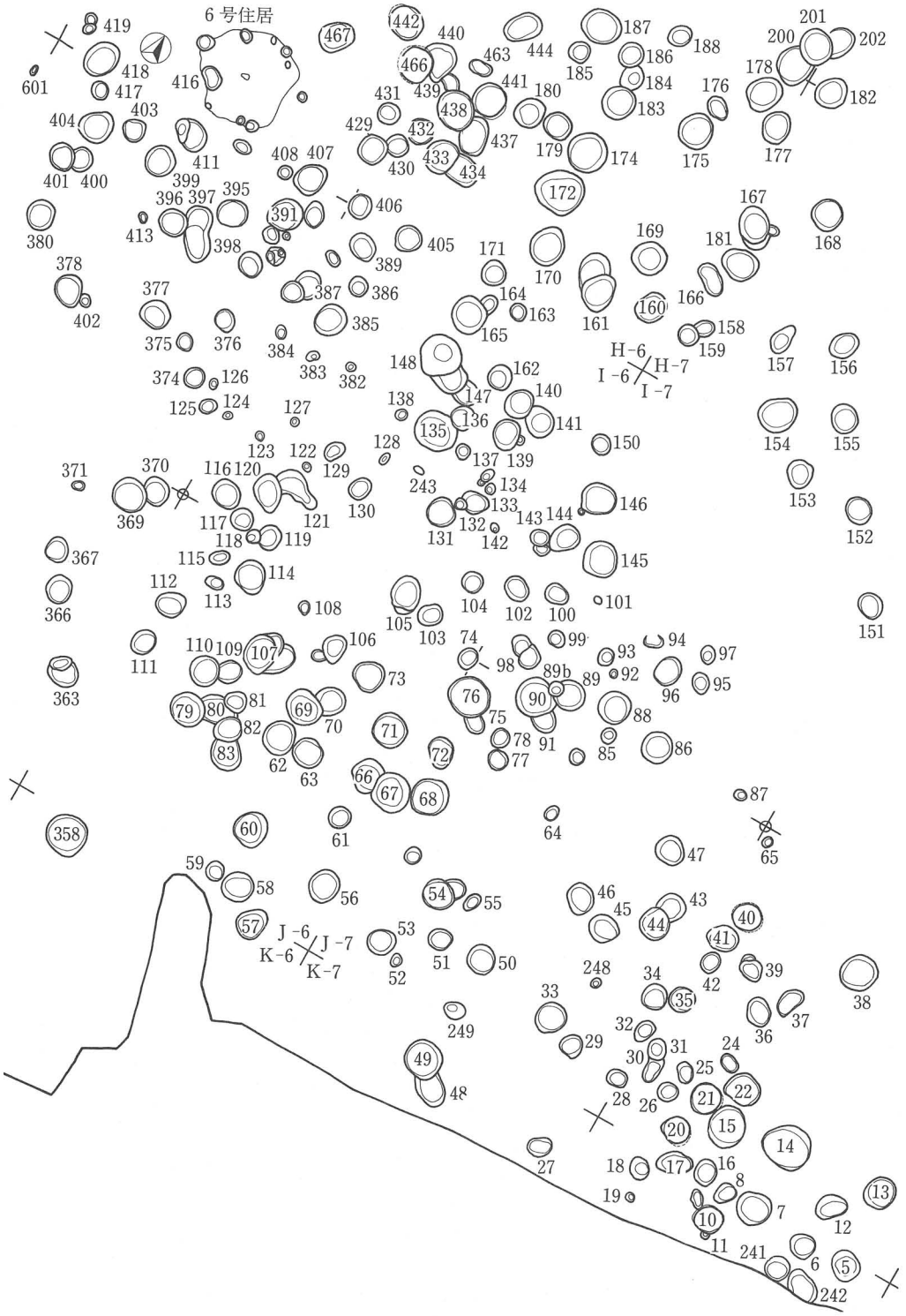
以上のように分類できた土坑であるが、前述のように土坑は基本的には「穴」であり、その開け方によりその性格が様々に変容してくるものと思われる。今回の調査により得られた土坑につ



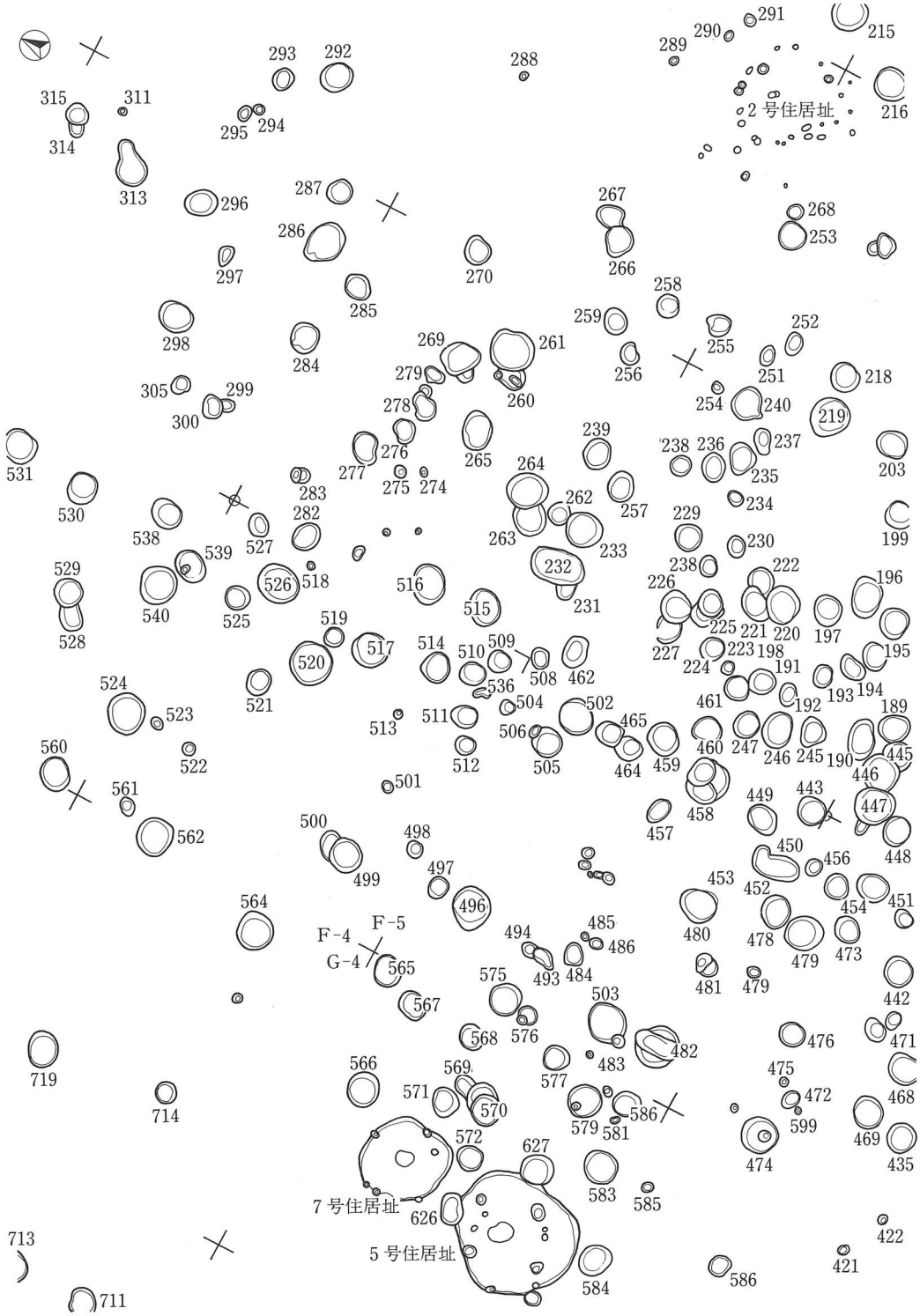
第14図　検出された土坑(1)（1/40）



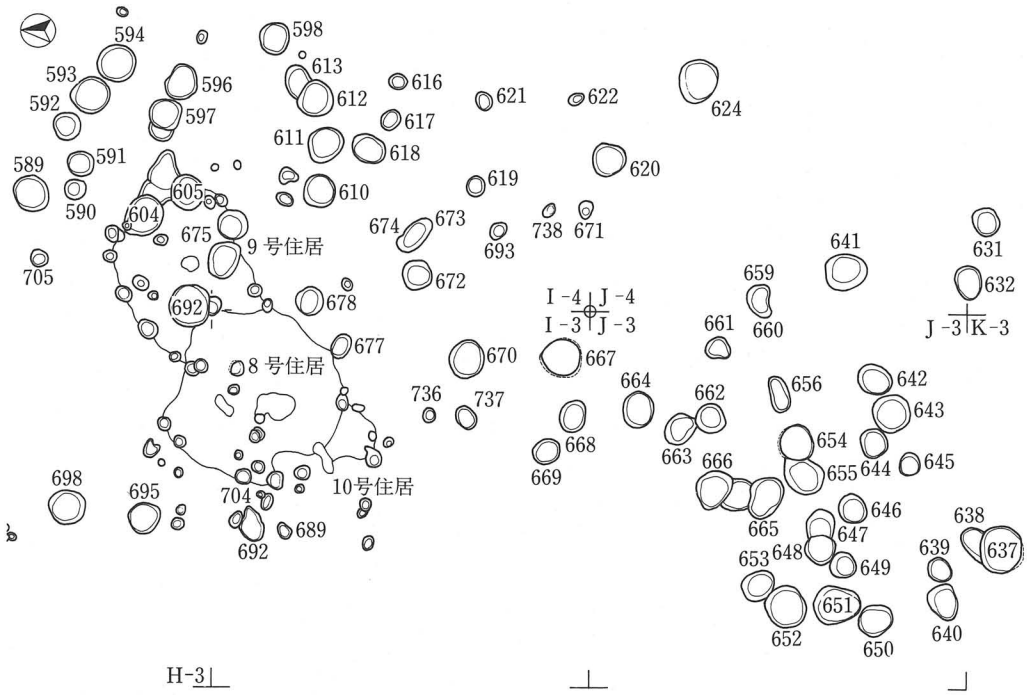
第15図　検出された土坑(2)（1/40）



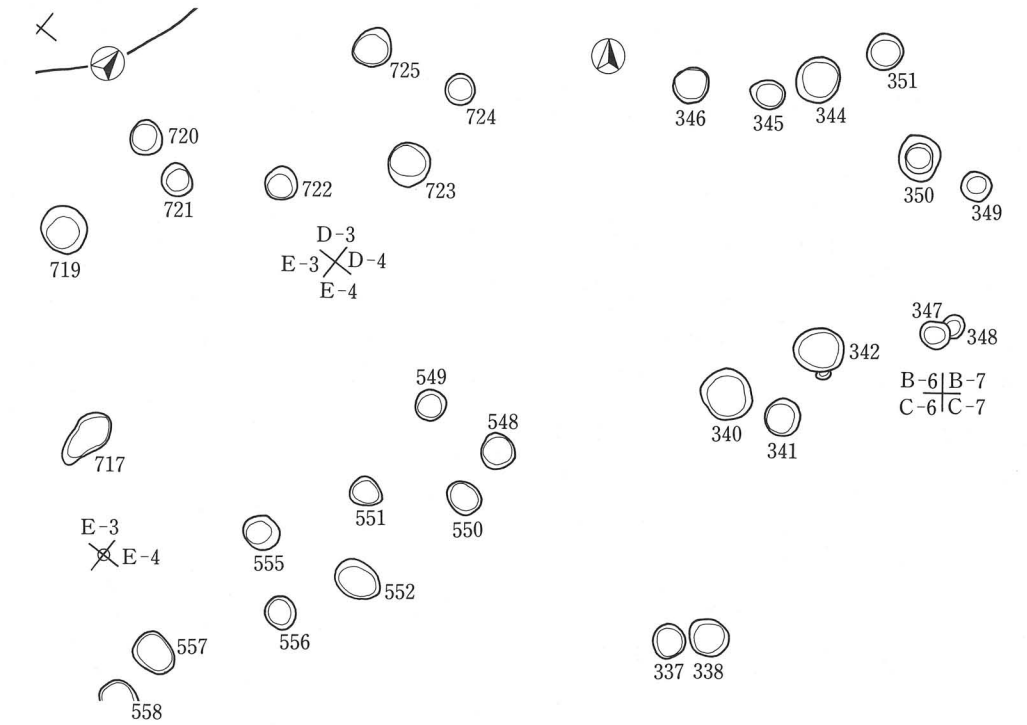
第16図　Ⅰ－6・7周辺の土坑分布（1/200）



第17図　F－4・5周辺の土坑分布（1/200）



第18図　Ⅰ－３・４周辺の土坑分布（1/200）



第19図　Ｄ－３・４周辺の土坑分布（1/200）

第20図　Ｂ－６・７周辺の土坑分布（1/200）

いて断面形や平面プランより2群6類に分類したが、大雑把に見て第Ⅰ群はしっかりした基本的な構造を保有する坑、第Ⅱ群は簡易なものと捉えることができ、そのような構造差に用途差を考えることができるのではないか。

一般的に中期集落の場合集落内に構築される土坑は墓坑としての性格を与えているものが多いが、今回得られた土坑全てを墓坑とすることはできない。なぜなら約700基にも及ぶ土坑全てが墓とすれば、そこに埋葬されるた者の数は単純に計算して700人にも及び、本遺跡の居住人口をはるかに超え、本遺跡が「死者の町」の様相を呈してしまう。また、土坑の構造に差異が見られる点などを考慮すると、土坑は多岐に亘って用いられた「穴」と理解でき、従来より考察されている貯蔵穴、ゴミ穴、墓壙等の幅広い用途を考えるべきであり、坑の掘り方や埋没の状態、遺物の検出状態等が用途を想定できる資料となろう。本遺跡で得られた土坑に関する資料をこれらの状況より考えると、第Ⅰ群1類は貯蔵穴、第Ⅰ群4類①a・cは墓壙を想定することができるが、第Ⅰ群1類の中には（第15号・第21号土坑等）埋没の状態、遺物の検出状態等から墓壙を想定でき得るようなものも存在し、一概に形状等で土坑の用途を規定できない難しさがある。しかし、単純に坑の掘り方だけを考えると墓壙とでき得るものよりも、貯蔵穴と考えられるものが本遺跡の場合主体を占めた。

本遺跡と同時期の岡谷市扇平遺跡、地獄沢遺跡、原村大石遺跡なども多数の土坑が検出されており、これらの点を加味すると中期初頭は「穴」を多用した時期と想定でき、「穴」の持つ意味を考えると興味深いものがある。（守矢）

方形柱穴列

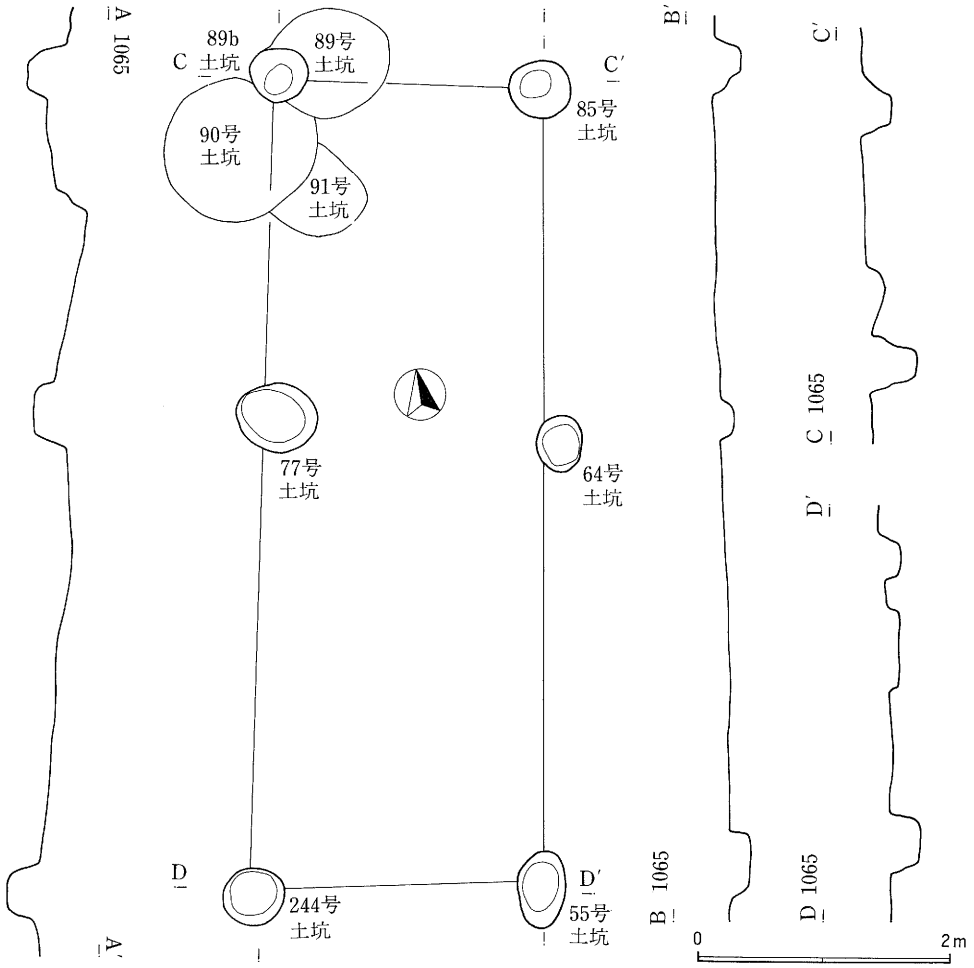
検出された土坑内にその配置より方形柱穴列の構成土坑と成り得る可能性のあるものが6基検出され、これを有機的に結び付け1基の方形柱穴列を確認した。

第1号方形柱穴列（第18図、図版7）

遺跡南側中央にに位置する。遺構検出当初は本址の存在は不明確であったが、第55号（P_1）・第64号（P_2）・第85号（P_3）・第89b号（P_4）・第77号（P_5）・第244号土坑（P_6）の6ヶ所の土坑がある程度の規格で長方形に並ぶことにより本址を認定した。

本址の平面プランは長方形を呈している。東西辺が長辺、南北辺が短辺となる。長辺方向の東辺は6.38m・西辺は6.52mであり、0.14mほど西側辺が長い。短辺方向の北辺は2.12m・南辺は2.34mであり、やはり北辺と南辺には誤差があり、南側辺が0.18m長い。短辺、長辺の長さに誤差が見られることより平面プランには若干の歪みが見られる。長軸方向はN—10°—Eを示す。柱穴列内の面積は約14.47㎡である。

方形柱穴列を構成する土坑の平均口径は53.5㎝、深さは平均で26.3㎝を測り、その規模は他の時期に見られる方形柱穴列の土坑に比べて貧弱であった。また、土坑の土層は粒子が細かく、粘性を有し締まりの良いもので、ローム粒子とロームブロックを若干含む暗褐色土の単一層であり、所謂柱痕状の痕跡や埋め戻しの状況を観察することはできなかった。土坑内より出土遺物はなく、



第21図　第１号方形柱穴列（1/60）

本址の時期決定をし得る資料は得られてはいないが、他の土坑との重複関係などより中期初頭に帰属すると思われる。（柳川）

ロームマウンド（図版10）

所謂ロームマウンドと総称される不正形な掘り方が４ヶ所検出されている。検出当初は土坑として認定されているものもある。第１号ロームマウンドが最大で長径295cm・最深60.1cm、最小は第２号ロームマウンドで長径156cm・最深40.7cmである。長軸方向は第１号N－47°－E、第２号N－45°－W、第３号N－72°－E、第４号N－64°－Eである。それぞれより縄文中期初頭の遺物が出土している。第１号は規模が大きいためか出土量が多く、土器片・黒耀石砕片・ピエスエスキーユ２・打製石斧１が出土している。（柳川）

4. 縄文時代の遺構の構成

今回の発掘調査により竪穴住居址、土坑、方形柱穴列、ロームマウンドが確認されている。こ

れらは組合わさり「稗田頭C縄文ムラ」を形作っている。また、今回得られた遺構群は、縄文時代中期初頭の割合短時間の時間内で生活が営まれた単純集落であったことにより、中期初頭のムラを考察する上で貴重な資料である。

遺構の重複関係について　本遺跡は大まかに見ると縄文時代中期初頭の時間枠内に納まるものであるが、実際遺構のあり方を見ると、中期初頭の時間枠の中でも度重なる変遷があったことが窺え、中期初頭と括られている幅は数段階に区分できることが理解できる。得られた遺構の重複関係を整理すること大まかな時間的変遷を捉えることがことができ、それを基に「稗田頭C縄文ムラ」の景観を復元することができる。

約700基にも及ぶ土坑の重複関係はその概要を見ただけでは度重なる重複を持っているように見えるが、大雑把に重複関係を括って見ると最多で3回位の重複が認めあられる。これらの大半は遺物等が含まれていない場合が多いために時間的な設定をできないものが多い。

住居址の場合重複関係を持っているものは第8号・第9号・第10号住居址である。重複関係から整理すると、第9号・第10号住居址を切って第8号住居址が構築されており、旧 第9号・第10号住居址→新 第8号住居址の変遷を捉えることができる。重複関係は持たないが第5号・第7号住居址の場合余りにも近接する位置に住居址が構築されていることから、両者は時間差を有しているものと考えられる。

住居址の分類と構成　本調査により縄文時代中期初頭の住居址は9軒が検出されている。これらは全て竪穴構造を持ち、平面プランが判明したものだけを見た場合、不整形なややつぶれた形の円形を呈するものを基本としている。

住居址の規模は第5号住居址位を平均とするが、第7号・第4号住居址のように小型の規格の住居址もあり、特に第4号住居址の場合炉址を持たない点や主柱穴構造が不規則である点などを考慮すると、他の住居址とは分離し作業小屋等の所謂竪穴状遺構と取り扱うべきかもしれない。

第7・8・10号住居址のあり方がやや異なるものの、径が小さく深い掘り方の主柱穴が炉を囲むように4本で構成されるもの（第2・3・5・6号住居址）、6本で構成されるもの（8・10号住居址）が主柱穴配列の基本である。

炉址は地床炉と埋甕炉の2者が認められたが、地床炉が主体を為し埋甕炉は第2号住居址の1軒だけである。本遺跡と同時期で良好な住居址群が検出されている原村大石遺跡の例などを見ると、中期初頭の炉は地床炉から埋甕炉へと変遷することが判明しており、これを考慮すると第2号住居址を他の住居址よりも新しい段階に帰属させることができよう。

竪穴住居址の変遷　住居址の重複関係を出土遺物や住居址構造から裏付けなければならないが、住居址から得られた土器群や住居址構造に大きな差異がなく、時間的な変遷を明確にし得てはいない。しかし、第III章第3節2で述べたように土器群を詳細に分析してみると、隣接する位置の第5号と第7号住居址の土器群の構成に若干の差異が生じている。また、第3号・第5号住居址と第8号住居址の土器群構成に共通性があり、これらの点を考慮すると第3号・第5号・第8号

住居址は同時に存在した可能性が高く、第７号住居址は位置関係や土器構成などから見ると分離すべきであろう。また、第２号住居址が埋甕炉を有する点や炉体土器として用いられていた第群３類より他の住居址よりも最も新しい段階に帰属すると考えられる。

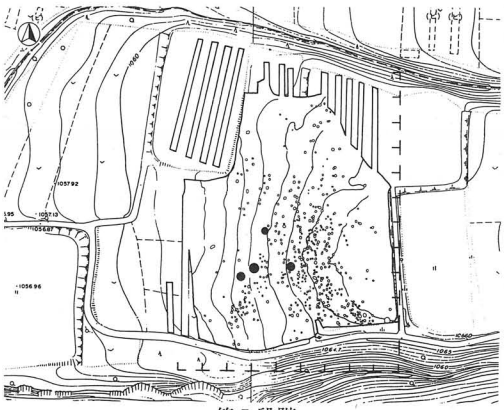
重複関係、土器構成の差等を整理すると本遺跡は大きく３段階の変遷を遂げたことが窺え、下記のように変遷を辿ることができようか。

第Ⅰ段階　第６号・第７号・第９号・第10号住居址

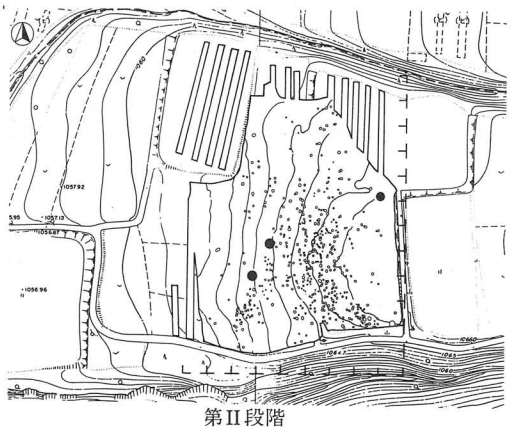
第Ⅱ段階　第３号・第５号・第８号住居址

第Ⅲ段階　第２号住居址

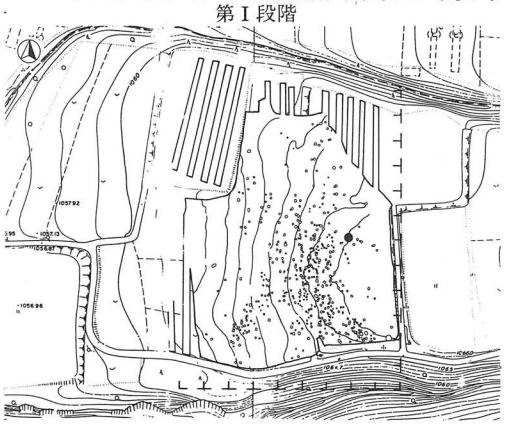
以上のように重複関係・土器構成の差から本遺跡の変遷を考えてきたが、３段階に区分された本遺跡の住居址数規模は、他地域の中期初頭集落が少数の住居址で構成される傾向と同様な様相を呈している。今回は時間的な制約等より土坑まで含めた形の集落の構造について考えることができなかったが、土坑は量や様々なバリエーションを持つことなど考慮すると集落内でその占める位置は重要であったと思われ、これらがある程度のグループを形成している点などを観点にし、竪穴住居址とどのような組合せになるかを今後検討し、再考する必要があろう。　　（守矢）



第Ⅰ段階



第Ⅱ段階



第Ⅲ段階

第22図　遺構の段階変遷図

第３節　発掘された遺物

1. 平安時代の遺物（第20図）

第１号住居址より出土した遺物は、ほとんどが細片であり、接合する資料は非常に少なかった。このうち個体数のわかるものは、土師器坏12個体、同高台付坏２個体、黒色土器高台付坏４個体、甕１個体、小型甕８個体、灰釉陶器皿１個体、碗９個体である。黒色土器坏は破片のみしか確認できなかった。その他に鉄滓が出土している。

Ａ、土師器　坏　住居址内より出土した細片は64片あり、そのうち接合関係や高台の数から少なくとも12個体が存在することがわかった。口縁部は共通して、緩やかに外反し端部は丸味を帯びている。外底部は磨滅が激しいが、ロクロ挽後糸切りと考えられる。焼成は不良で胎土は非常に脆く、白色粒子（長石）や赤色粒子（褐鉄鉱）・雲母などを多量に含みざらざらしているもの—Ａ（１・２）と、胎土が粉末状で不純物をあまり含まないもの—Ｂ（３）、その他—Ｃの３種類に分類できる。そのうちＡは50.5%、Ｂは37.5%、Ｃは12.5%である。圧倒的にＡの比率が多く、産地の同じ土器を多く所有していたことが考えられる。

高台付坏　２片確認できるだけである。１点は底部と高台が一部が残っている。高台は外反し端部は丸味を帯び内側に入る。非常に脆く、白色粒子などを多く含む。もう１点は、高台の一部だけ残存したもので、不純物が少なく胎土はしっかりしている。

Ｂ、黒色土器　坏　破片が32点出土している。坏の破片は胎土により２種類に分類できる。焼成がやや不良で胎土に不純物を含むものと、粉末状の胎土をもち、不純物をほとんど含まないものがある。前者は18片、後者は14片出土している。

高台付坏　半完形品が２点、底部が２点、破片が19点ある。これらはいずれも暗文を持つ。外底部は糸切り後、高台を付け、全面なで整形している。４は高台が外反し、端部は丸味を帯て内側に入る。暗文には大別して２つの傾向があり、一つは４と同様の暗文、もう一つは５と同様の暗文のである。もう一つ口縁部に横縞状（Ｃ）の暗文を持つものがある。これらの胎土はほとんど焼成は良好で、胎土が粉末状で不純物をほとんど含まないものばかりである。

Ｃ、甕　長胴甕　底部と思われるものが１個体分出土している。赤褐色で、胎土に白色粒子を多く含む。外底部に木葉痕がみられる。

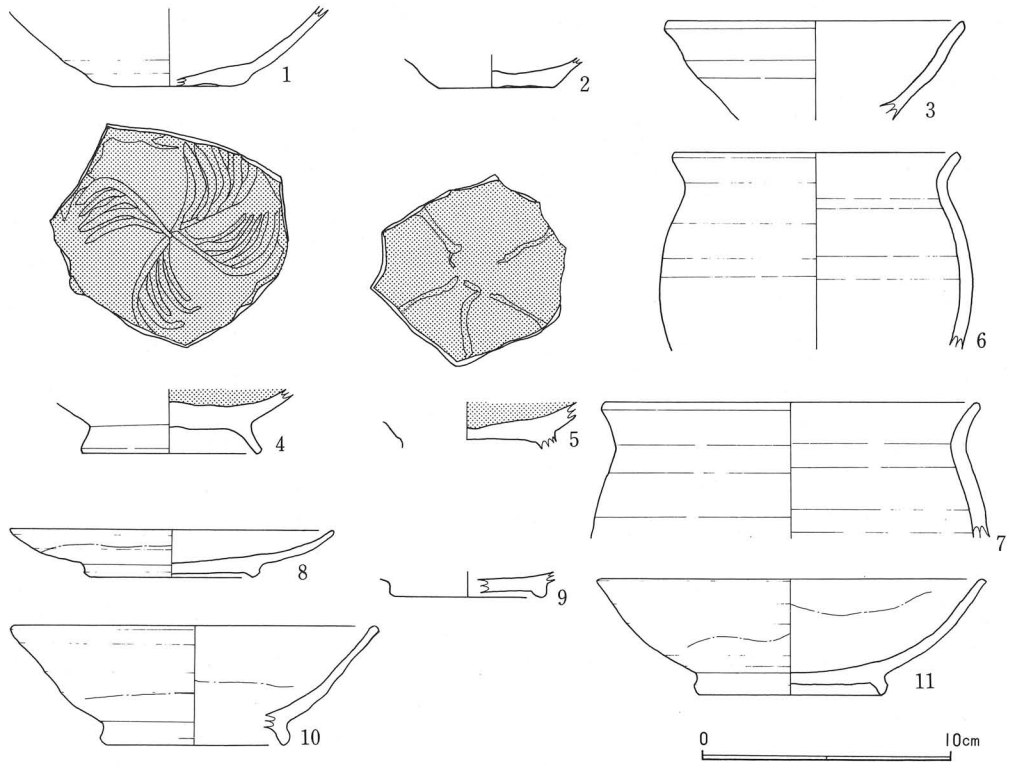
小型甕　７個体分出土している。このうち２個体を図示した。いずれも粘土紐巻き上げ、ロクロ挽と考えられ、６は頸部が緩く「く」の字状に屈曲し口縁の端部は直線状に内側に入っている。色調は茶褐色で、胎土は焼成が良く堅緻であり、不純物をほとんど含まない。もう一点酷似した破片が出土している。７は頸部が「く」の字状に屈曲し、端部は丸味を帯びている。赤褐色の色調を呈し、焼成はやや不良である。胎土に白色粒および雲母を微量に含む。これらの小型甕には共通する点は見い出せない。

Ｄ、灰釉陶器　皿　ほぼ完型品が１個体（８）検出されている。器形は口縁部端部がやや丸味

を持ち内彎する。体部はロクロ挽である。底部はロクロ処理後低い高台を付け、端部が丸味を帯びる。胎土や施釉方法は碗と同様である。

碗　半完型品が２個体（10・11）、底部が１個体（９）、破片が５個体分出土している。碗の作りは同様の傾向を持つ。口縁部は端部がやや外反し、丸味を持ち直立する。玉縁のものもみられる。体部はロクロ挽。底部は回転糸切り処理後の付高台で、高台脇のみをナデ整形している。高台はやや端部が内彎気味で丸味をおびている。焼成は良好で堅緻、胎土の色は白灰色で、若干細粒子を含む。施釉方法は漬け掛けで、白色発色となる。

E、その他　鉄滓　床下土坑４の壁際から出土し、最大長５㎝、最短長2.5㎝、重量は21gである。表面に気泡のあとはみられず、重量感がある。　（柳川）



第23図　第１号住居址出土遺物（1/3）

2. 縄文時代の遺物

A、土器　土器の概要　今回の調査により得られた遺物は、縄文時代ではその全てが中期初頭所謂九兵衛尾根Ⅰ式に帰属し、この時期を考える上には貴重な資料である。土器は重量にして約50kgが得られているが、そのほとんどが破片で個体復元ができ得たものは11個体と少ない。住居址や土坑に重複が見られる点などを考慮すると、中期初頭と一括している土器群は分類でき得るものと思われ、遺構の重複関係等を考慮すると、少なくとも２段階に分離でき得る可能性を持っ

ている。

土器の分類　今回の調査により得られた約50kgに及ぶ中期初頭の土器を分類するに当たって、必要な要件である個体（器形）の識別でき得る資料は少なく、破片が主体となっていたこともあり、分類分析する際の大きな基準は土器片の文様要素に依るところが大きい。そのために分類した群の中には、同一個体でありながら部位の文様要素により分離されてしまっているものもあるが、土器全体の概要構成を考えることができた。

文様要素を大きく分類する際その基礎となり得る要素には、その地文を挙げることができる。大きく地文を分類すると、縄文を地文とする群—Ⅰ群、半割竹管状工具等による平行沈線を地文とする群—Ⅱ群、Ⅰ・Ⅱ群の折衷する群—Ⅲ群、文様を有しない無文の群—Ⅳ群の4群が認められた。これらの基準に従って住居址内より得られた19.66kg（検出された土器全体の約40%）の各群の占有率を見ると、Ⅰ群6.7%、Ⅱ群55.1%、Ⅲ群8.6%、Ⅳ群29.5%で縄文施文の群が少なく沈線文施文の群が主体をなすことが把握できる。

第Ⅰ群　縄文施文の一群で縄文のあり方より大きく1類2種に分類することができる。これらの群は施文されている部位より見ると、胴部施文のものが主体をなす。

第Ⅰ群1類（2・39・40・54・55）　縄文だけが施文されている一群で、その縄文原体のあり方により2種に分類できる。A種は最も単純な縄文施文の一群で、単節のＲＬ、ＬＲの縄文原体による縄文が縦位帯状に施文される。B種は原体末端が結節された縄文原体を用いた縄文が施文される一群で、結節部が蛇行し垂下するものが主体をなす。

第Ⅱ群　半割竹管状工具による平行沈線を基本的なモチーフとしている一群であるが、沈線を密に施文し地文のような効果を出しているものはなく、むしろ分割などに平行沈線を用いている場合が多く、地は無文の場合が主体を占める。本群の基本モチーフを平行沈線としたが、単にこれだけではなく、半割竹管状工具により描きだされる隆線、連続爪形、結節状沈線等も本群に帰属させる。半割竹管状工具により描きだされる文様により2類に分類できる。

第Ⅱ群1類（2～5・8～13・41～48・56～62・70～72）　半割竹管状工具による平行沈線を用い、懸垂状や横位等に区画構成となる一群で、平行沈線間は隆線状とならない。このような基本文様構造に管側を用いた交互刺突が加わるA種、平行沈線に結節状沈線が加わるB種、平行沈線、交互刺突、結節状沈線が組合わさるC種の3種類が認められる。

第Ⅱ群2類（14～30・63・64・73）　基本的な文様構成は、半割竹管状工具による平行沈線間がポジティブとなる隆線を基本とする一群で、隆線の状況により分類できる。隆線だけで構成されるA種、隆線上が連続爪形文となるB種が認められる。

第Ⅲ群　縄文施文のものと、沈線文の折衷する一群であるが、第Ⅰ群の文様構成だけで成立する土器群はなく、第Ⅰ群は基本的には第Ⅲ群の一部に包括されるものであり、地文だけに着目すると縄文施文の土器群と括ることが妥当であろう。

第Ⅲ群1類（31～36・49～53・65～67・74・75）　地文の縄文に加え半割竹管状工具による平

行沈線、交互刺突が加わる一群で、地文の縄文原体が単節縄文のA種と、原体末端を結節したB種とが認められる。

第III群2類（37・38・68・69）　地文の縄文に隆帯や隆線等が付加される一群で、隆帯上に連続爪形を有するもの、隆線が結節浮線となるものが認められる。尚、地文の縄文は1類の縄文に比較して節の粒が大きく撚りの弱い原体を用いる傾向が見られる。

第III群3類（1）　基本的な文様構成は2類と類似するが、地文の縄文がＬＲ、ＲＬの単節縄文を結束した原体を用い、羽状構成の縄文を施文する特徴を持ち、貼付される隆帯も環状突起の付く曲線状隆帯と他の類には見られない要素であり、胎土や焼成に他の群とは相違が見られ異系統の土器かと思われる。

第IV群　無文の土器群を一括した。胎土等の状況を考慮すると第II群の胴部・底部破片が本群を構成するものと思われ、新たに一群を構成しない方が妥当であるが、文様による土器分類の基準に基付いて本群を設定した。

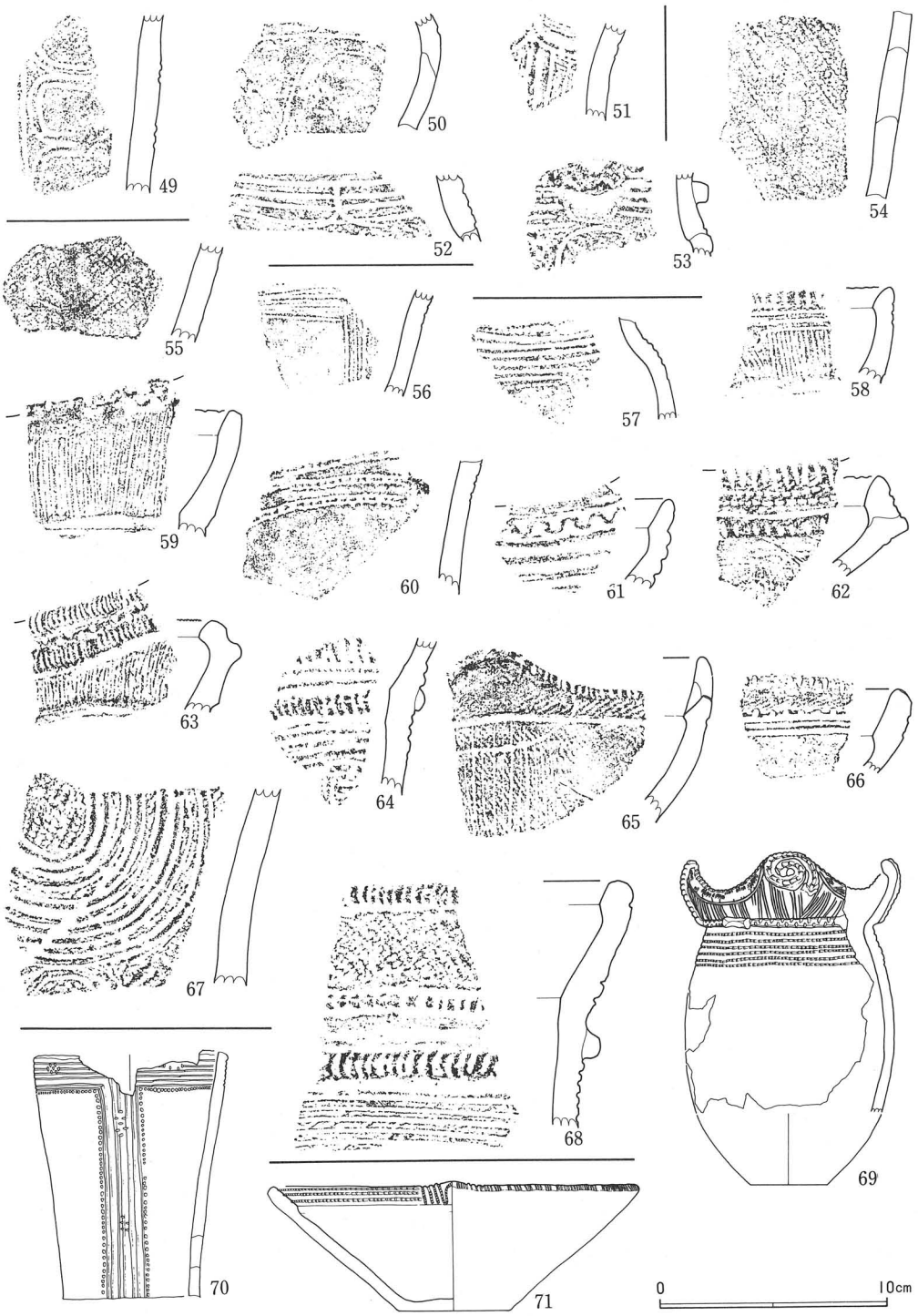
僅かながら器形の窺える土器を分類すると、大別して深鉢と浅鉢が認められる。深鉢では口縁部形態は不明だが、胴部は直線状に広がるバケツ形を呈するもの—Ａ1（70）。口縁部が丸みを持ち広がり、頸部で締まり胴部が直線状となるもの—Ｂ1（19）。口縁部・頸部の状態はＢ1と類似するが、胴部の上半が膨らみを持つ器形—Ｂ2（76）。基本的な器形はＢ1と類似するが、口縁部上半でやや内湾気味に屈折する器形—Ｂ3（7）。基本的な器形はＢ1を踏襲するが、頸部が膨らみを持つことに特徴を持つ—Ｂ4（75）。Ｂ4の変化と思われる器形で、口縁部が大きく開き、頸部が算盤玉状に膨らみ、胴部は直線状となる変わった器形—Ｂ5（73）。浅鉢は上面観に特徴を持ち、その形状で分類することができる。上面観が円形を呈する一般的な器形—Ｃ1（71）。上面観が菱形を呈する変形の浅鉢—Ｃ2（72）が認められる。Ｃ1・Ｃ2共に文様は口縁部内側に施文される。Ｃ2器形の上面観が変形する浅鉢は他の中期初頭の遺跡でも見られる。

土器群の構成と時期　前項のように検出された土器群を、その文様要素より4群に大まかに分類した。これらは大枠では中期初頭所謂九兵衛尾根Ｉ式の幅の中に収まるものであるが、これらの土器を出土した遺構の状況を加味すると、少なくとも2時期には分割できる可能性がある。そこで近接する関係にあり、同時には存在したとは思えない第5号住居址と第7号住居址の土器について比較検討してみたい。

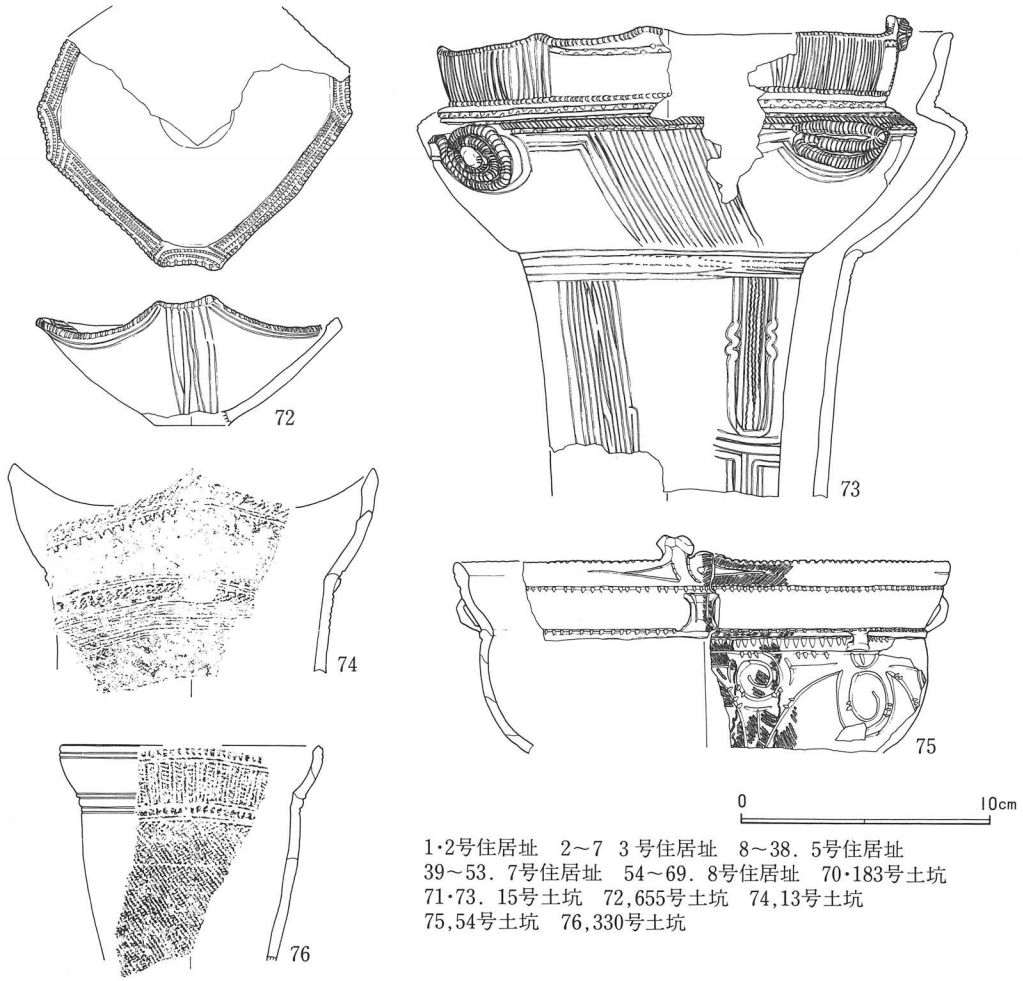
第5号住居址と第7号住居址の土器群構成は基本的には大きな差異はなく第Ｉ群から第IV群で構成されている。しかし、詳細に見ると類種の中に差異を見出すことができる。第5号住居址は第Ｉ群1類Ａ・Ｂ種、第II群1類Ａ・Ｂ・Ｃ種、2類Ａ・Ｂ種、第III群1類Ａ・Ｂ種、2類、第IV群の土器群より構成され、第7号住居址は第Ｉ群1類Ａ・Ｂ種、第II群1類・2類Ａ種、第III群1類Ａ・Ｂ類、第IV群より構成されている。この両者を比較すると第7号住居址には、第III群2類に見られるような隆帯、隆線、結節浮線の文様構成が認められない点に特徴を持っている。これだけの資料で即断はできないが、この差異は時間差によるものかとも考えられる。尚、第3

第24図　第３号・５号住居址出土器（1/3・1、3、19は1/6）

第25図　第５号・７号住居住居址出土器（1/3）



第26図　第７号・８号住居址、第15号・183号土坑出土土器（1/3、69～71は1/6）



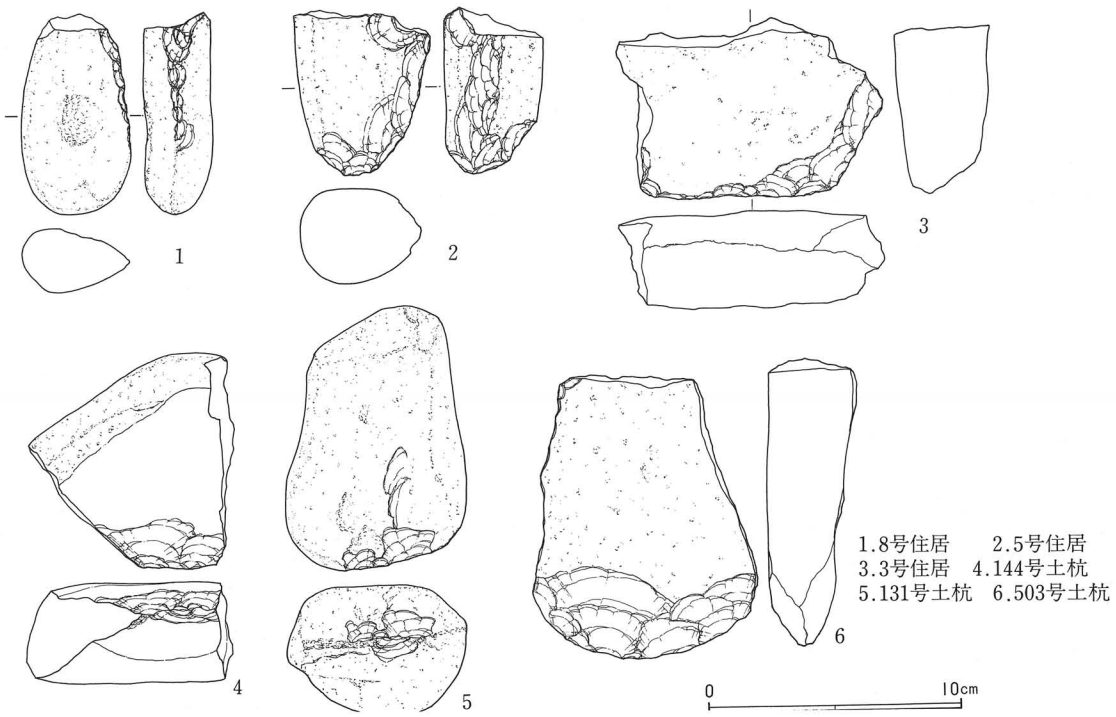
1･2号住居址　2～7　3号住居址　8～38．5号住居址
39～53．7号住居址　54～69．8号住居址　70･183号土坑
71･73．15号土坑　72,655号土坑　74,13号土坑
75,54号土坑　76,330号土坑

第27図　第13号・15号・54号・350号・655号土坑出土土器（1/6）

号・第8号住居址の土器構成は第5号住居址と同様な傾向にある。

興味深い資料は第2号住居址の炉体土器として用いられていたもので、第III群3類に帰属しその状況から異系統のものと考え、環状突起を有する曲線状隆帯やそれを取り巻くように施文される隆線等の文様構成や、白色岩石粒子を含む軟質な傾向の胎土等を考慮すると、北陸系統の色彩を持つ土器かと考えることができようか。隆帯構成や地文に相違はあるものの隆線や区画状況の類似する資料が茅野市頭殿沢遺跡第14号住居址186に見ることができるが、本類が文様要素に若干古手の傾向が窺え、これらより類推すると所謂九兵衛尾根Ⅰ式期でも最も新しい段階近辺に時間的な位置を想定することができ、本遺跡内で最も新しい段階に帰属すると考えられる。

B、石器　石器の概要　今回の調査により得られた石器は総数にして148点を数え、その量は一概に多いとは言えないが、縄文時代中期初頭と限定された単純遺跡の数量としては器種、量共



第28図　安山岩製の礫器（1/3）

に揃っている。また、本遺跡の立地する台地上には本来礫を産出しない点より、遺跡内から得られた全ての礫は他より持ち込まれたという観点に立って、回収・分類した結果、従来安山岩自然礫と一括されたものの中に人為的に調整剝離を加え、礫器や敲打器等の石器とする資料が認められ、石器素材や石器組成の面に課題を投げかけた。（第28図１～６）

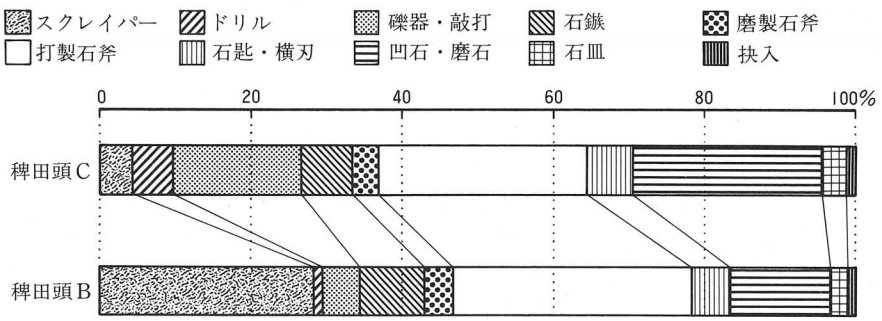
石器の分類　今回の調査により得られた石器を分類すると、その石器のあり方は一般的な縄文時代中期の遺跡とそう大きな差異が見られない。その製作素材から石器を分類すると、剝片を素材とする石器と、礫核を素材とする石器、素材礫をそのまま変形させずに用いる石器の３者が認められる。これを数量的に見ると、最も多いのが礫核を素材とする石器で、素材礫を無変形の石器、剝片素材の石器の順となる。最も多用された礫核素材の石器をその石質より見ると、緑色片岩系の素材を用いるものと（打製石斧等）、安山岩系の素材を用いるもの（礫器等）が認められ、器種により使い分けが成されており、特に遺跡付近の火砕流内に含まれ、容易に入手できる安山岩系の素材を多用する傾向が窺える。

石器の組成　今回検出された石器をその用いられ方より分類し、本遺跡の石器組成がどのような構成となっているか検討してみると、打製石斧等に代表される生産具37.1%、石皿や凹石等の調理具28.4%、スクレイパーや礫器等の加工具26.4%、石鏃等の狩猟具6.6%、その他1.5%で占められ、植物採取や加工に関わったと思われる道具類が主体となることに特徴を持つ。このこと

は本遺跡内で植物の占めるウェイトが高かったことを示している。また、多数検出された土坑を貯蔵穴と仮定したならば、本遺跡の食料供給の中で植物性のものに依存している傾向を遺構の面からも強調できる。このような結果を中期初頭で近接する稗田頭B遺跡と比較してみると、全体の傾向は類似するが、個々の器種で見ると凹石・磨石、スクレイパーの数量に相違が見られ、調理具の占めるウェイトが本遺跡の方が高かったことが窺えた。

石器等に関する課題　本遺跡内に石鏃やドリル・スクレイパーなどの石器素材である黒耀石剝片・砕片・所謂ピエスエスキーユは重量にして1.356kgが遺跡内に持ち込まれている。この量は石鏃に換算（石鏃１点の重量は、本遺跡で得られた一般的な石鏃の重量0.7ｇを基準とした。）すると約1,937個に相当する量である。これだけの量が遺跡内に持ち込まれながら実際に黒耀石を用いた石器は石鏃やドリル・スクレイパーで重量にして99.2ｇ、黒耀石総重量の約6.8%だけであり、多量に黒耀石が消費されている割に製品の数量は少なく、何のために黒耀石を消費しているのかが判然としない。想像を豊かにするならば本遺跡で生産された製品群が他へ搬出された可能性も考えられ、同時期で近接する関係にある稗田頭B遺跡では黒耀石の総重量は約450ｇしかなく相互の関係について興味深いものがある。　（守矢）

第１表　稗田頭C遺跡石器組成比率



第IV章　調査の成果と課題

第1節　稗田頭C遺跡周辺における平安時代後期の散在住居址群について

今回の調査で平安時代の住居址が単独で1軒検出されている。同様な遺跡は茅野市域だけでも数ヶ所見られる。本稿では本遺跡周辺に位置する同様な遺跡と本遺跡との性格を考察したい。

遺跡の分布　稗田頭C遺跡周辺で同様の遺構を持つ遺跡は、立石(80)・城(81)・中ッ原A(83)・神立林(84)・与助尾根南(86)・竜神平(88)・鴨田(90)・稗田頭A(91)・上ノ平(166)遺跡があげられる。本遺跡に最も近い鴨田遺跡とは約250mの距離関係にある。このうち発掘した遺跡は6遺跡あるが、いずれも単独で住居址が存在する遺跡と考えられる。

遺跡の立地　標高はいずれも950～1100mの位置にある。遺跡の立地条件を見ると、城・中ッ原A・鴨田・稗田頭A・与助尾根南・上ノ平は長細い尾根の先端部を区切る場所に住居址が位置し、尾根の先端部を意識していると考えられる。立石は様相が異なり、台地の中央部に住居が立地している。

遺物の構成　各遺跡で出土した土器の構成を見ると、鴨田は土師器坏・同高台坏・黒色土器坏・同高台坏・灰釉陶器碗・同皿・甕・小型甕で構成されており、須恵器は出土していない。土師器坏の中には、長石や赤鉄鉱を多量に含む非常に良く似た胎土を持つものがある。また、黒色土器の内面に見られる暗文でも、第23図4や5に酷似した暗文を持つものがある。甕類は底部に木葉痕が見られるものも出土している。与助尾根南は黒色土器底部が・坏底部・大破片・土師器坏・底部・高台付坏・甕・小型甕・鉄滓が出土し、須恵器及び灰釉陶器は見られない。立石は、土師器坏・掻目を持つ甕・黒色土器坏・須恵器大甕が出土し、灰釉陶器は出土していない。黒色土器には放射線状の暗文が見られる。また、墨書土器も見られる。土師器の中には甲斐型坏が存在する。中ッ原Aは攪乱が激しく掻目を持つ土師器甕破片が出土しているだけである。城遺跡は2軒の住居址を検出し、第1住居址からは土師器坏・黒色土器坏・甕・小型甕・灰釉陶器瓶が出土した。調理・貯蔵具の割合が多い。第2住居址は攪乱を激しく受けており出土したのは須恵器の大甕破片のみである。上ノ平は土師器高台付碗・灰釉陶器碗・同皿・羽釜・小型甕が出土している。

まとめ　以上見てきたように各遺跡間で遺物の構成が同じ遺跡や異なる遺跡があり、同じ構成でも稗田頭Cと鴨田では個々の数量が異なる。稗田頭Cは供膳具の比率が高いのに対し、鴨田は調理・貯蔵具の比率が比較的高い。鴨田では前述の通り稗田頭Cと酷似した土師器・黒色土器が出土しており、同一生産地のものを使用していたことが判る。上ノ平では酷似した灰釉陶器碗が出土しているが、稗田頭Cが碗7個体・皿1個体、鴨田の碗4個体・皿1個体に対し、上ノ平では碗6個体・皿2個体・段皿2個体と保有率が高い。各遺跡の遺物の構成や土器の編年を見るとある程度の時期差がみられ、立石・城—鴨田・稗田頭C・上ノ平—与助尾根南と時期的にグル—

プ分けができる。八ヶ岳西南麓に単独住居址の人々の進出した時期は同時ではなく、たとえば立石グループが廃絶した後、ある程度の期間をおいて稗田頭Cグループが進出したと考えられる。臼田武正氏[(1)]のいう「分村的な性格」を持つものと考えられる。ただ、臼田氏は母村を諏訪盆地に近い高部などの集落としているが、母村は遺跡に近い中核的集落とも考えられるのではないだろうか。近年、発掘によって新井下(59)・棚畑(44)・山寺(71)という中核的な集落が確認されており、母村は八ヶ岳西南麓にも求められるのではないだろうか。稗田頭Cと上ノ平・与助尾根南は鉄滓・鉄釘といった鉄製品を検出した。これらの遺跡からは小鍛冶に関する遺構・遺物は見られないため、近辺の本村との係りが考えられる。宮坂光昭氏[(2)]は中核的集落に小鍛冶集団の存在を想定し、ある一定のテリトリーを持っていたことを述べたが、本稿で取り上げている散在住居址群は宮坂氏の言う小鍛冶集団のテリトリーの中に含まれる遺跡と考えられる。現在稗田頭Cに近い集落としては、「古田」が位置し、この集落は嘉禎3年（1237）『祝詞段』に見られ古代から存続した集落の可能性があり、稗田グループの母村として想定できる。

今後の課題　なぜ本村より離れて散在する住居が出現するのか、進出した人々が一体どのような生業を営んでいたのかが判っていない。また、立石は台地の中央部に位置しているがこれが例外的なものなのかどうかも問題であろう。（柳川）

〈参考文献〉

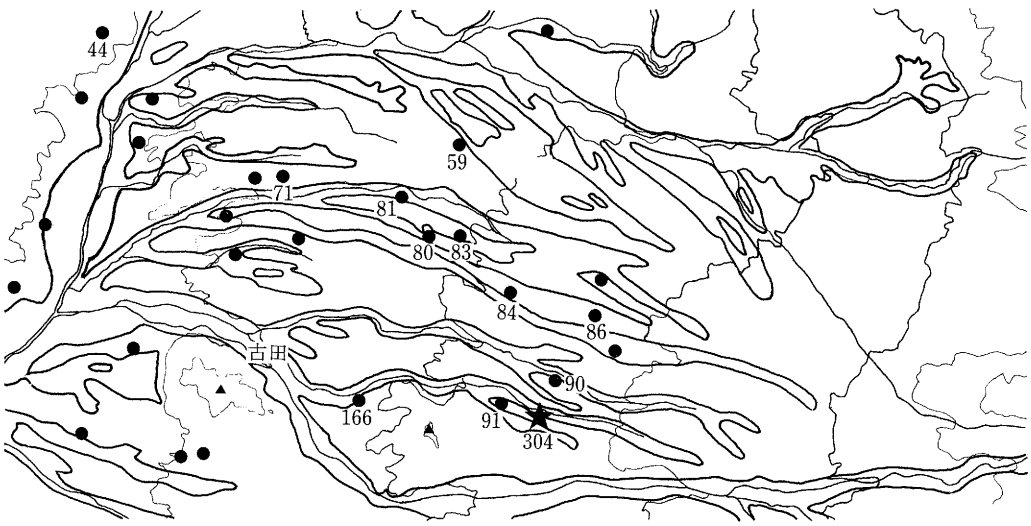
(1) 臼田武正　1986「第2章 第2節 考古学から見た古代の茅野」『茅野市史 上巻』

(2) 宮坂光昭　1991「諏訪地方平安時代小鍛冶址の考察」『諏訪市史研究紀要 第3号』

守矢昌文　1992『城遺跡』茅野市教育委員会

守矢昌文　1993『中原A遺跡』茅野市教育委員会

百瀬一郎、他　1993『鴨田遺跡』茅野市教育委員会



第29図　稗田頭C遺跡周辺の平安時代の遺跡の分布

第2節　縄文時代中期初頭における稗田頭C遺跡周辺の遺跡の展開について

1. 稗田頭C遺跡周辺の遺跡分布

第Ⅰ章第2節でも記述しているように稗田頭C遺跡周辺は多数の遺跡が密集している部分で、巨視的に見ると、大きな遺跡群を構成していることが理解できる。これらの遺跡の密集のあり方を時期を超えて見ると、隣接する台地に谷を隔てて位置するものと、同一台地内で若干の距離を持って位置するものが認められる。

稗田頭C遺跡周辺で同様な時期の遺跡をピックアップしてみると、上見遺跡、中原遺跡、稗田頭A遺跡、稗田頭B遺跡、鴨田遺跡を挙げることができ、半径約0.5km内に6ヶ所もの縄文時代中期初頭の遺跡が分布することで、この地域が中期初頭の「ムラ」の密集地であることが理解できる。現在のところ中期初頭の遺跡がこれだけ濃密に分布している地域は、市域の八ヶ岳西南麓においては見られず、中期初頭の遺跡群のあり方を考える上に重要な地域である。

2. 稗田頭C遺跡と周辺の遺跡との比較

第Ⅰ章第2節で周辺遺跡の概略について記述したが、中期初頭に限定して再度各遺跡の遺構のあり方について確認し、稗田頭C遺跡の状況と比較してみたい。

上見遺跡　65基の土坑が確認されているが、その内の12基は陥し穴で、この陥し穴について報告書中では中期初頭の時期を与えているが、他の例や重複関係よりみて早期に帰属させた方が妥当であると考えられ、この12基を除いた53基が中期初頭の土坑と考えられる。土坑はしっかりした構造を持つもの（報告書内では土坑Ⅱ類）と、そうでない割合不正形で不鮮明なもの（報告書内では土坑Ⅲ・Ⅳ類）が認められ、前者が21基検出され中期初頭の土坑の約40％を占めている。この群の土坑を稗田頭C遺跡の土坑と比較すると、断面形が所謂巾着型等を呈するものが上見遺跡では検出されておらず、盥状のものが主流を占めていることが窺える。このような土坑の構造差が偏る傾向についてどのように解釈するべきであろうか。このしっかりした構造の土坑の分布をみると、1ヶ所の重複を除き他は重複関係を持たず、一定の距離を置きある程度のグループを形成するように分布している。このことはこれらの土坑が短期に構築されたためと理解でき、中期初頭においては長期に存続した遺跡でないと考えられる。また、上見遺跡を構成する遺構は土坑だけで竪穴住居址のような居住空間は確認されていない。出土している土器は結節浮線やソウメン状の貼付隆帯、沈線間がポジティブな密接沈線等が施文される土器群で、稗田頭C遺跡の土器群よりも古い様相を呈しており、稗田頭C遺跡よりも早い段階に上見遺跡の土坑群が形成されたものと考えられる。

中原遺跡　中期初頭と思われる遺構は、土坑5基、竪穴住居址1軒が検出されている。中原遺跡の土坑は重複関係を持たず隣接し、その形状は様々であるが断面が巾着型の土坑2基が認められている。竪穴住居址は9.24m×8.41mの巨大な規模を持つ。構造は7本の主柱穴を持ち、貧弱な地床炉で、主柱穴に立替えを有していた点などを考慮すると、数期に亘り継続していたこと

が窺える。検出された土器は稗田頭C遺跡の古い段階に帰属する土器群に類似し、稗田頭C遺跡の古い段階に中原遺跡の住居址も存在していた可能性が高い。

稗田頭A遺跡　稗田頭A遺跡は中期後半の集落と重複しているために、中期初頭の遺構を単純な形で抽出することは難しいが、報告書によると竪穴住居址3軒、数基の土坑から構成されている。竪穴住居址や土坑は中期後半・後期前半の土坑と重複しているために明確にその姿を表すことはできないが、竪穴住居址は台地南側斜面に沿うように点在し、第1号住居址は中期初頭間の重複関係を持っていることより、中期初頭において2期に細分ができる。稗田頭A遺跡の中期初頭の土坑の構成を見ると、中期初頭の土器を埋置したような土坑や、断面形が巾着型・フラスコ型の土坑（本遺跡の第Ⅰ群1類）が検出されており、稗田頭C遺跡の土坑の構成と類似する部分がある。住居址形態についても地床炉構造に類似点を見出すことができる。土坑数は不明な部分が多いが、稗田頭C遺跡比較するとその量は多くはなく、数基単位が竪穴住居址に付随する形を採るものと考えられる。遺構の構成は数量的な差はあるが、竪穴住居址、土坑より構成されるあり方は稗田頭C遺跡と同様な傾向である。検出された土器については未整理な部分があるため多くを語れないが、稗田頭C遺跡と同様な傾向が窺える。また、前期末の竪穴住居址が検出されており、前期末から中期初頭への発展を考える上に貴重である。

稗田頭B遺跡　稗田頭A遺跡の南側、谷を隔てて隣接する形の尾根状台地に立地する遺跡で、早期末に帰属すると思われる陥し穴を除けば、検出された全ての遺構は中期初頭に帰属する稗田頭C遺跡と類似する中期初頭の単純集落である。竪穴住居址9軒、土坑149基が検出されているが、稗田頭B遺跡の土坑を詳細にみると、その多くがシミ状の落ち込みや、不整形な浅い不明瞭なものが主体を占め、実際に構造のしっかりした土坑は53基に過ぎず、まずこの点が稗田頭C遺跡と比較できる。竪穴住居址の構造も炉構造に差異がみられ、B遺跡では埋甕炉構造が主体をなすことに特徴を持つ。また、竪穴住居址内に巾着型・フラスコ型の土坑が構築されているものもある。土器について見た場合、B遺跡のあり方は結節浮線施文・沈線間がポジティブな密接沈線が施文される古手の土器群と所謂九兵衛尾根II式に分離することができる。なお、古手の土器群を出土する遺構は構造のしっかりした土坑で、これらは遺跡東側に分布する傾向が認められ、遺物のあり方や遺構の分布等から見てB遺跡は二次期に分離することが可能であろう。この二者とも稗田頭C遺跡には認められていず、若干の時間差を考えることができる。

2. 周辺遺跡の遺構構成のあり方

周辺の遺跡の遺構構成のあり方をまとめると、貯蔵穴と思われるような構造のしっかりした土坑群だけで構成される遺跡—aタイプ（上見遺跡）、単独住居址と数基の土坑より構成される小規模な遺跡—bタイプ（中原遺跡）、数軒の竪穴住居址と土坑より構成される遺跡—cタイプ（稗田頭A遺跡）、数軒の竪穴住居址と多数の土坑群より構成され割合規模の大きな集落となる遺跡—dタイプ（稗田頭C遺跡）、割合多くの竪穴住居址だけで集落が構成され、土坑は若干しか構築されない遺跡—eタイプ（稗田頭B遺跡）の5タイプが認められる。これらを強いて各5タ

イプを性格付けしようとするならば、aタイプは食料保管等に関わるもの。bタイプは規模の大きな集落に付随する特異な傾向のもの。cタイプは規模の大きな集落の分村。d・eタイプは規模の大きな集落と考えることができ、本遺跡周辺のあり方を単純に見ると、各タイプの遺跡が組合さり一つの大きな群を構成しているように見える。

基本的なムラの構造（居住空間・墓・貯蔵空間）を有しているものはcタイプ・dタイプ・eタイプの遺跡であり、aタイプの遺跡のあり方は居住空間が欠落しており、この部分を他の遺跡に依存していたとも考えられる。cタイプ・dタイプ・eタイプの遺跡は基本的なムラの構造を保有しているが、個々の遺構の占有率を考えると、dタイプ・eタイプのあり方は土坑の数量に極端な差がある。なぜこのように遺構構成に差異が見られるのであろうか。この点は遺跡の保持している性格等に大きく起因するものと思われる。

3. 遺跡群の時間的変遷

一概に中期初頭の遺跡の集中と見えていた群も詳細に土器よる時間差を考えると、中期初頭の中において数段階に分離することができ、各遺跡が単純に一時期だけで大きな群をなしていたものとは考えることができず、何らかの理由でこの地域内で動いていたものと思われる。

上記の遺跡群の中期初頭の土器を時間的に分類すると、最も早い段階の土器群は、結節浮線文・ソウメン状貼付隆帯文・密接沈線文等の土器群で、上見遺跡の土坑群・稗田頭B遺跡の土坑の一部より検出されている—Ⅰ期。続いて稗田頭C遺跡第7号住居址等の土器群—Ⅱ期。稗田頭C遺跡第5号住居址等の土器群—Ⅲ期。稗田頭B遺跡第2号住居址等の土器群—Ⅳ期の段階を想定することができる。なお、Ⅰ期に先行する前期終末段階の稗田頭A遺跡第14号住居址、Ⅳ期に継続するように中期中葉狢沢式期の稗田頭A遺跡第5号住居址等があり、遺跡群の派生と展開を考える上に重要な資料となっている。

これらの遺跡の土器群と比較しながら周辺の遺跡の変遷を考えてみると、Ⅰ期からⅣ期の変遷を想定することができ、中期初頭の時間内に小地域で移動が有ったことが窺え、整理すると下記のようになる。

Ⅰ期　上見遺跡Ⅰ類以外の土坑群・稗田頭B遺跡第111号・122号土坑等

Ⅱ期　稗田頭C遺跡第7号住居址等の第Ⅰ段階に帰属する遺構・中原遺跡第1号住居址・稗田頭A遺跡住居址、土坑群

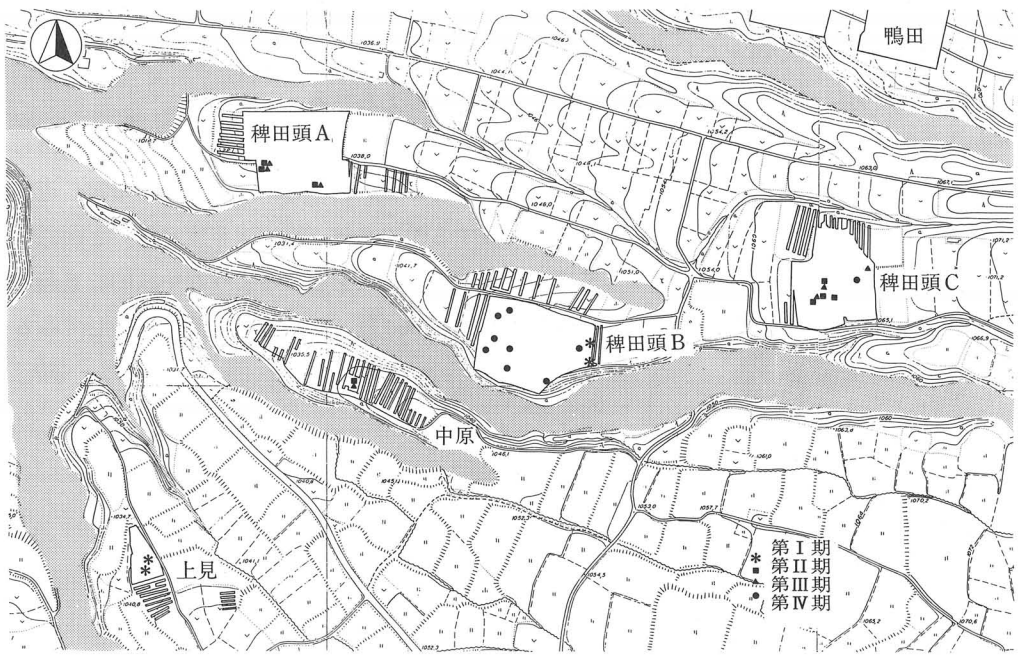
Ⅲ期　稗田頭C遺跡第5号住居址等の第Ⅱ段階に帰属する遺構・中原遺跡第1号住居址・稗田頭A遺跡住居址、土坑群

Ⅳ期　稗田頭B遺跡第2号住居址等・稗田頭C遺跡第2号住居址等の第Ⅲ段階に帰属する遺構

これを見ると各期の遺構の構成に若干の差異が認められることに着目できる。第Ⅰ期は土坑群だけで構成される遺跡が中心となり、第Ⅱ期以降竪穴住居址・土坑群で構成されるが、土坑の量に若干の変化が認められる。これをムラの様相の差異と考えると、数箇所のムラが相互に補完しながら存在していたものと思われる。この相互補完のあり方が稗田頭C遺跡の土坑の量と密接な関

係を有していたものと思われる。この点を加味し推論するならば、II・III期において稗田頭C遺跡は稗田頭A遺跡、中原遺跡の土坑の保持する性格的な部分をかなりの面で補完していたものと考えることができ、そのために土坑が集中するような結果となってしまったものと考えることができる。しかし、IV期に入り中心的な位置を稗田頭B遺跡に譲っている。

本遺跡が位置する大泉山東側地域一帯の遺跡群全体の時間的変遷の概略を最後に若干考えてみたい。この地域に最初に人々の足跡が認められたのは先土器時代で、上見遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡に貧弱な遺跡が認められる。縄文時代に入ってからは早期末の段階が初源で、上見遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡にこの時期に帰属すると思われる陥し穴群と、中原遺跡からは2軒の小規模な竪穴住居址が検出されている。石器組成や陥し穴群からこの地域が狩猟を中心とした領域であった可能性が考えられており、先土器時代の遺跡も含めて考えるとこの地域が伝統的に狩猟の場として利用されたことが窺える。これが前期末の段階ではやや様相を異にし、稗田頭A遺跡に竪穴住居址・土坑が構築され、これに続くように中期初頭に入って様々なタイプの遺跡が展開し、そのあり方は前時期の領域のあり方と様相を異にしている。中期初頭のI期の段階ではより生産領域としての性格が窺え、これが発展しII期段階以降へと展開したものと考えられる。この時期の特徴を代表する遺構である土坑を植物貯蔵等に関連したものと想定すると、この時期に植物に関わるウェイトが高くなってきたことを捉えることができ、この現象は石器組成にも認められる。多数の土坑群を植物貯蔵の増大と解釈すると、このような貯蔵がより安定した生活の基盤となり中期前半へと展開していった可能性を仮定できようか。　　（守矢）



第30図　稗田頭C遺跡周辺の遺跡変遷（1/3,000）

第Ⅴ章　結　語

今回本遺跡の調査のなされた大泉山東側地域一帯は市域の八ヶ岳西南麓内において、考古学的調査の少なかった地域である。しかし、平成２年度より開始された県営圃場整備事業槻木地区の実施に伴い、上見遺跡（平成２年度調査）・中原遺跡（平成３年度調査）・稗田頭Ａ遺跡（平成４年度調査）・稗田頭Ｂ遺跡（平成５年度調査）等の調査が行われ、徐々にこの地域状況が判明してきている。特に今回調査された稗田頭Ｃ遺跡は縄文時代中期初頭の単純集落のあり方は今まで行われてきた上見遺跡等の中期初頭の遺跡の解明に大いに役立つこととなり、この地域が中期初頭において遺跡が集中する箇所であることが判明した。八ヶ岳西南麓においてこの地域のように中期初頭の集落が集中する箇所は少なくそのような面からも今回得られた成果は重要であった。今回の調査の所見を加えこの地域における中期初頭の遺跡展開について前章において記述しているが、それによると大泉山東側一帯に点在する中期初頭の集落は、若干の時間差を持ち移動しながら展開しているが、稗田頭Ａ遺跡や中原遺跡などは本遺跡と相互に補完しながら存在していたことが窺え、一つの大きな遺跡群を構成していたことが判明した。また、個々の細かな点を見ると、本遺跡の遺構の主体をなす土坑のあり方についてその量や構造等から植物貯蔵に関わった可能性が高いと位置付けたが、土坑については先学により様々な役割が考察されており、これら等も含めて再度土坑の詳細な分析を踏まえて考える必要があろう。

中期初頭の集落がほぼ完全な形で他の時期と重複せず検出されている例は市域においては稀で、同時期の集落が小地域で群をなして展開している地域は限られている。このような点を踏まえ再度遺跡群のあり方について再構成しなければならないと考えられる。

平安時代後半の単独で検出された住居址は、従来、ある一定の時期に八ヶ岳西南麓に進出したと考えられていたが、その進出時期は一様ではなかったことが判明した。また、稗田頭Ｃ遺跡の住居址は、単独で営まれていたわけではなく、隣接する鴨田遺跡（平成３年度発掘）と関係があったことが考えられ、鉄滓の出土によって近辺の小鍛冶の職人を有するような中核的な集落とのつながりがあったことを述べた。今後時代的背景や、広域に亘った関連を考慮し再考してみる必要があろう。

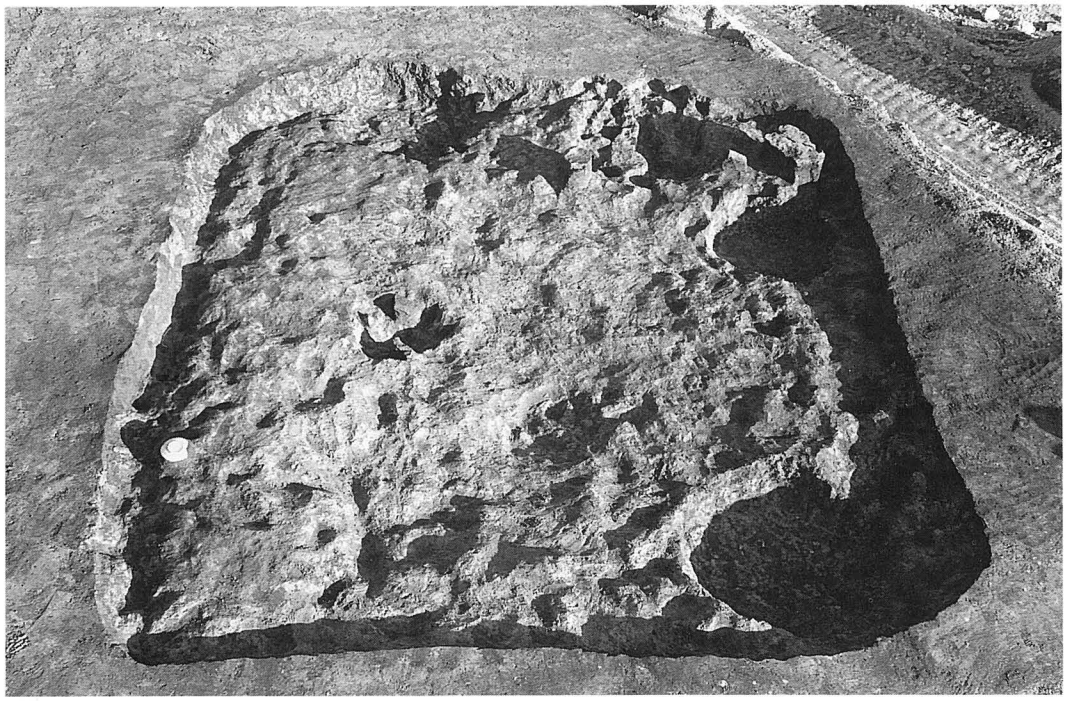
（柳川・守矢）

図　　版

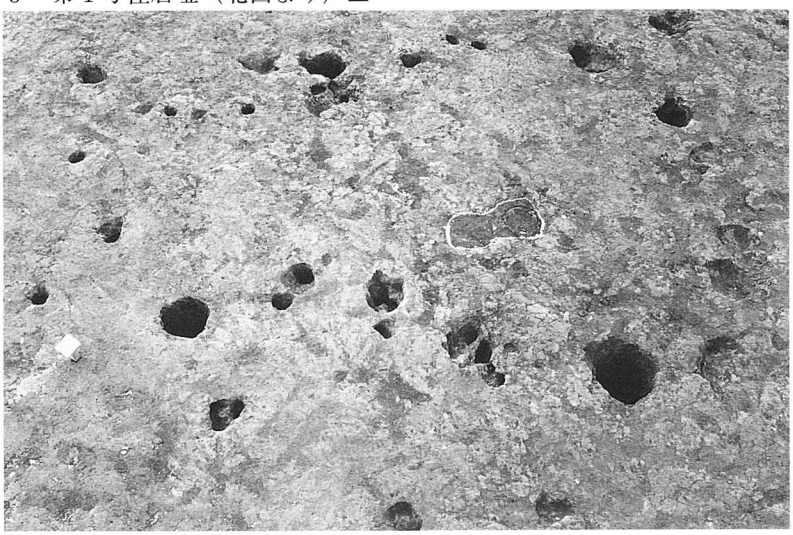
1　遺跡航空写真

2　遺跡遠景（南より）

図版－２

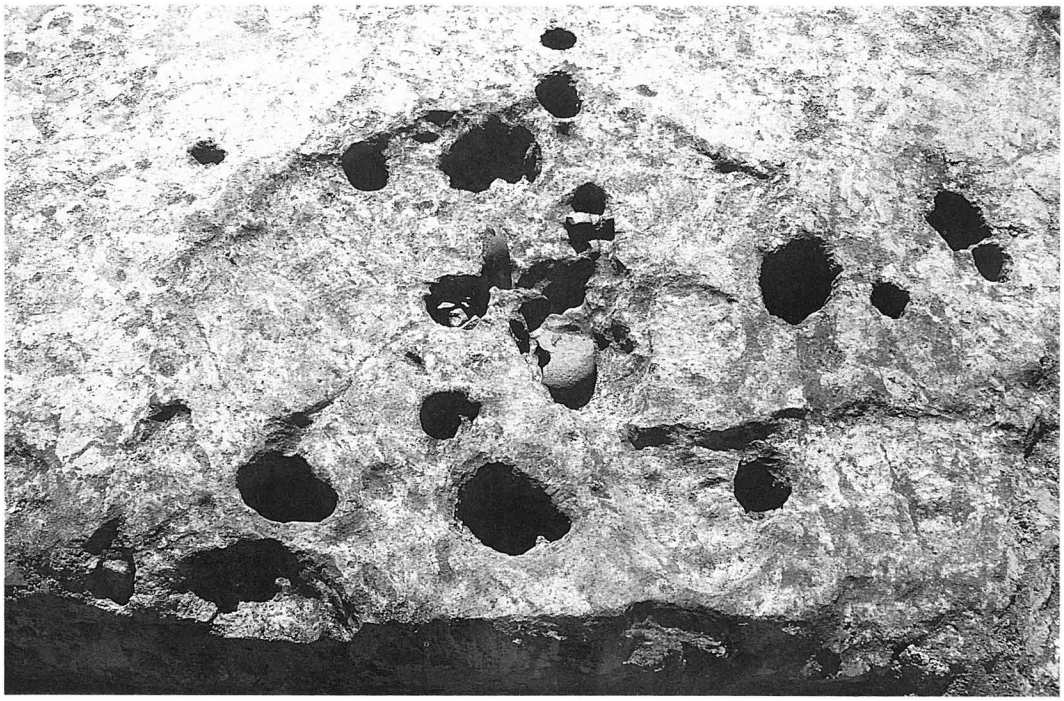


3　第１号住居址（北西より）▲

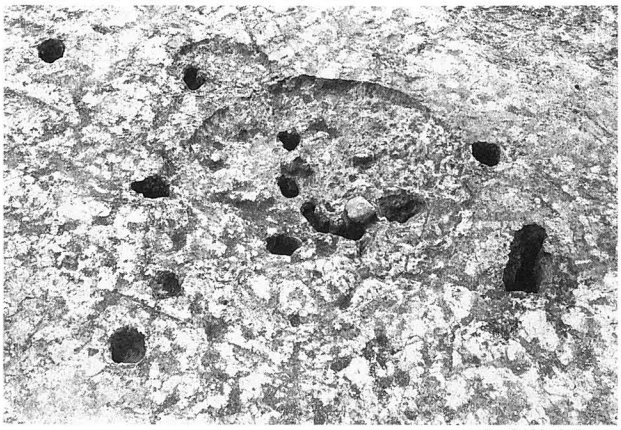


4　第２号住居址（北東より）▲

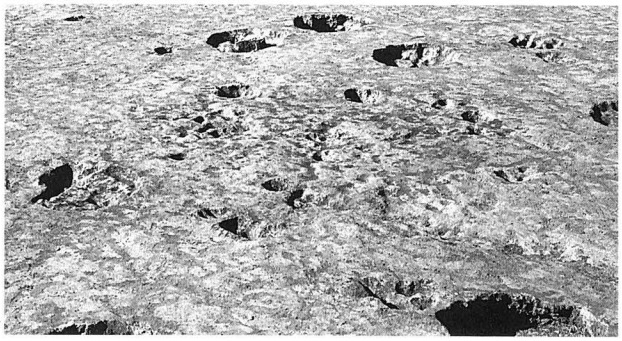
5　第２号住居址埋甕炉（南西より）▶



6　第3号住居址（北より）▲

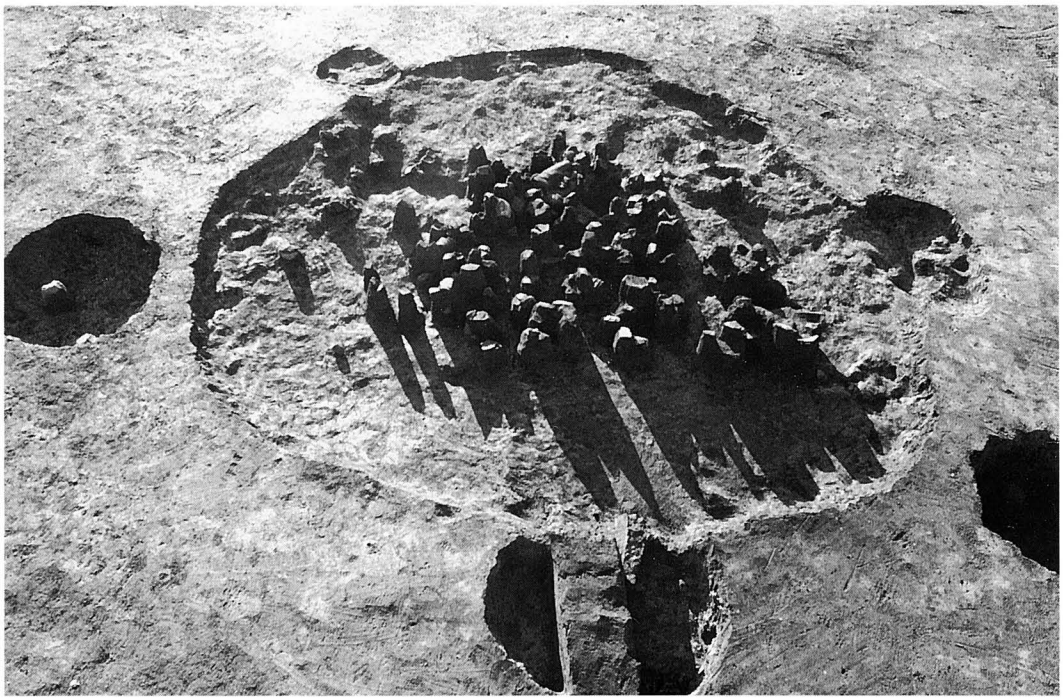


7　第4号住居址（北より）▲



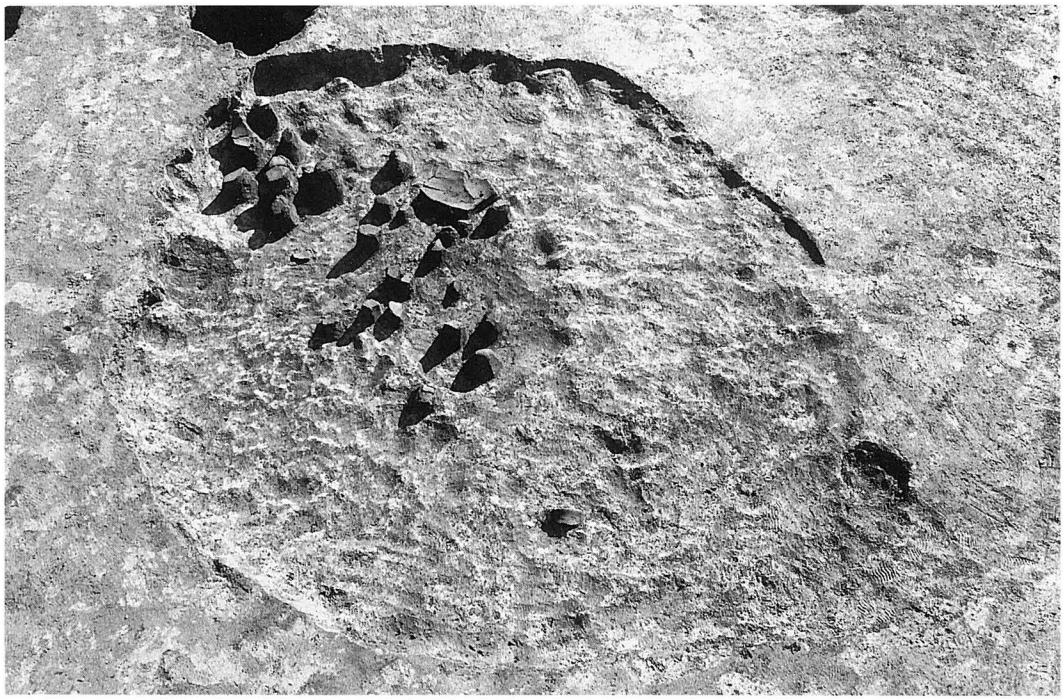
8　第6号住居址（西より）▶

図版－4

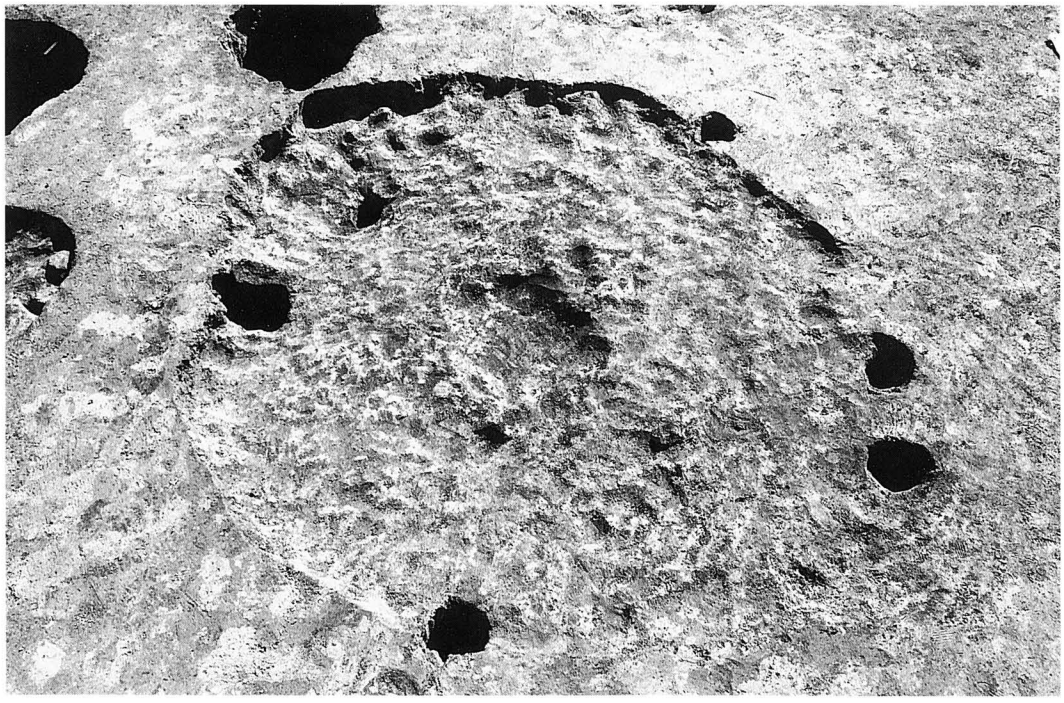


9　第5号住居址（東より）

10　第5号住居址（西より）

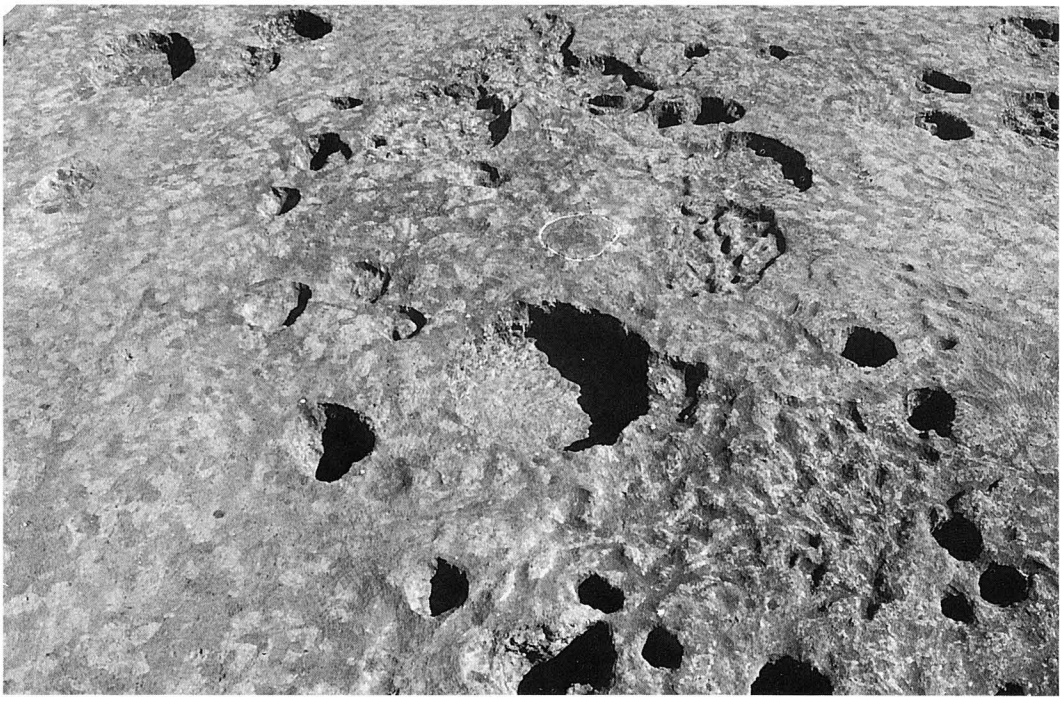


11　第7号住居址（西より）



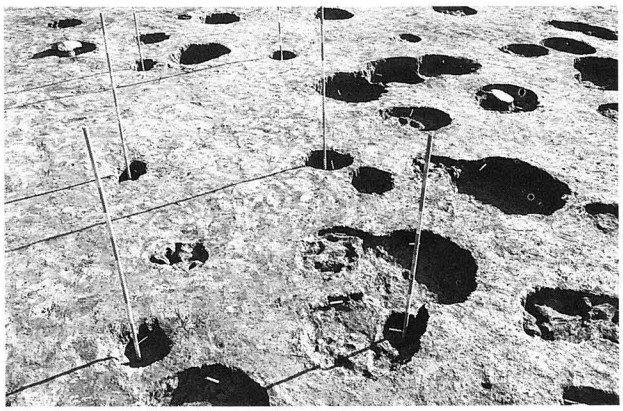
12　第7号住居址（西より）

図版－6

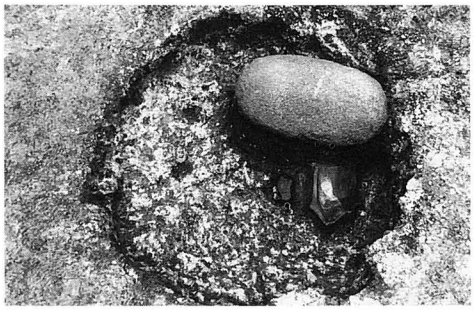


13　第8・9（奥）号住居址（西より）

14　第8・10（手前右）号住居址（西より）



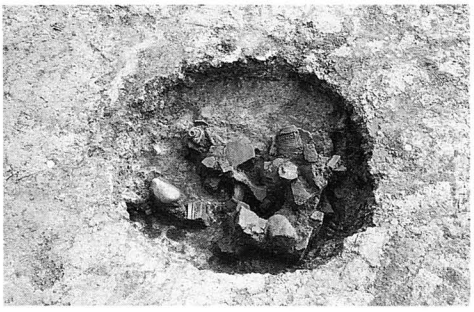
◀15　方形柱穴例（南より）



16　第13号土坑

17　第15・21（右）土坑

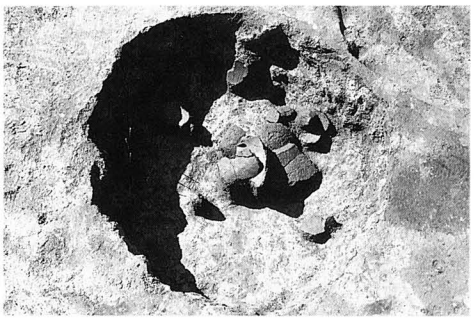
18　第54号土坑



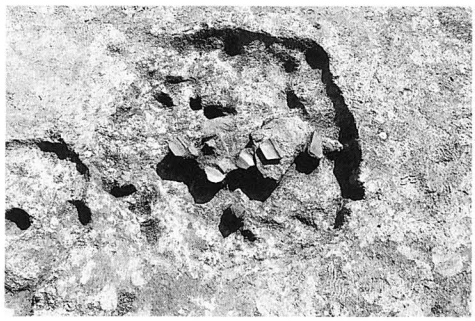
19　第152号土坑

20　第174号土坑

21　第189・190（左）土坑



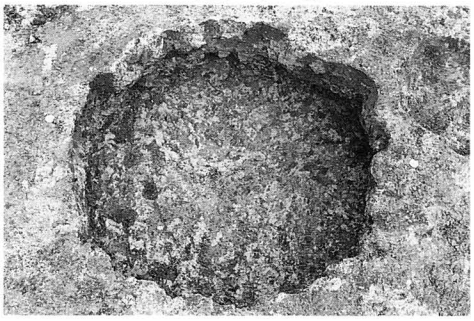
22　第246号土坑



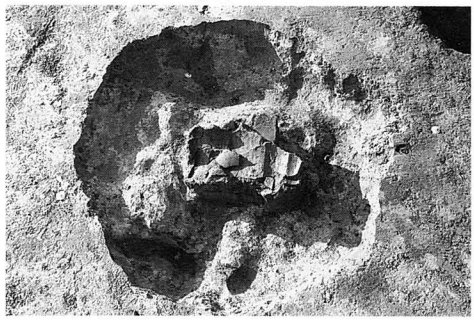
23　第253号土坑

24　第263・264（左）号土坑

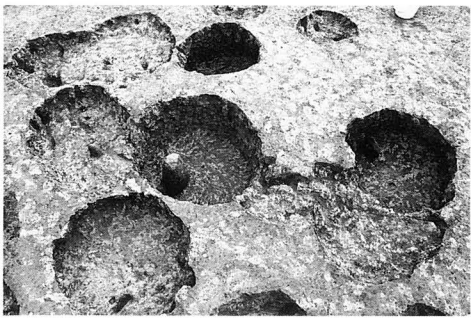
25　第400・401（左）号土坑



26　第407号土坑

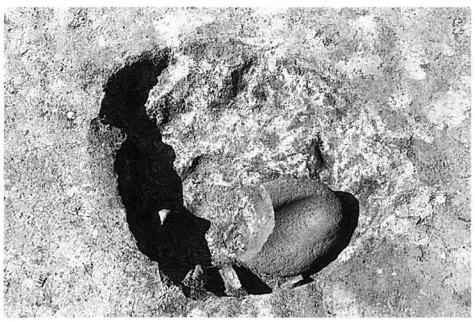


27　第435号土坑

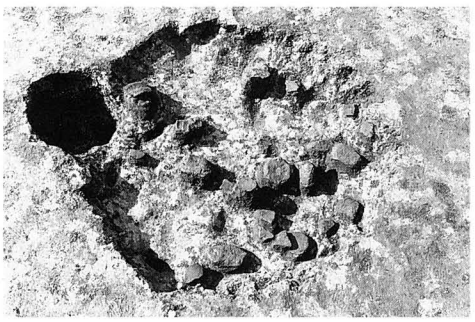


28　第438号土坑ほか

29　第446号土坑ほか

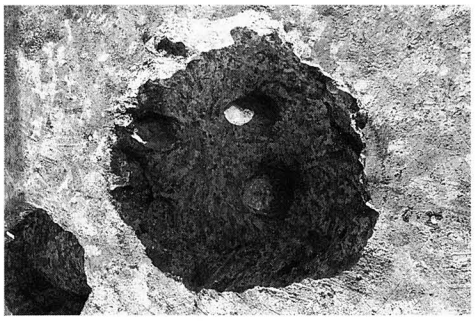


30　第449号土坑

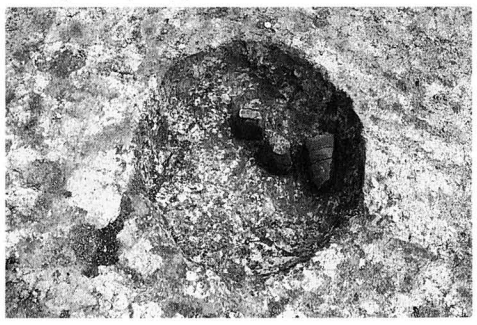


31　第483・503（右）号土坑

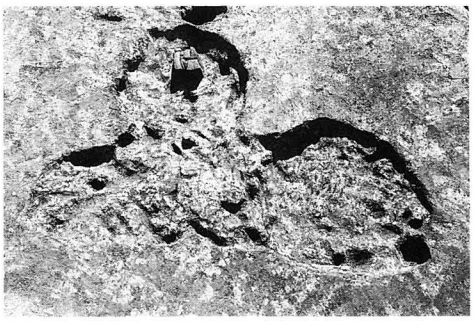
32　第516号土坑



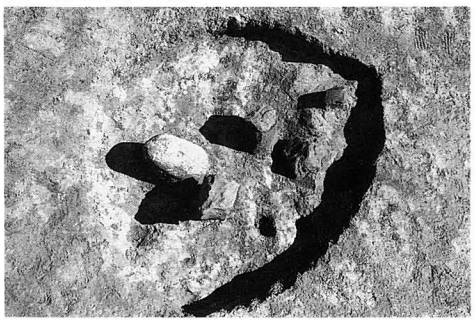
33　第526号土坑



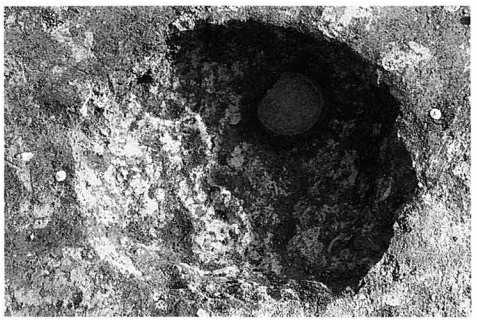
34　第550号土坑



35　第605号土坑ほか



36　第695号土坑



37　第712号土坑

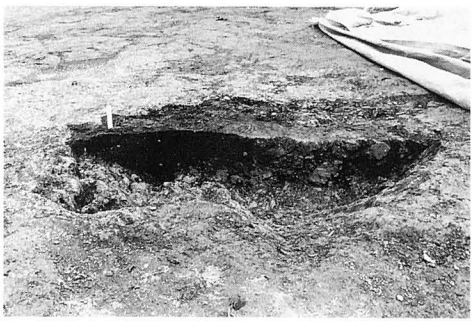
38　第15・21号土坑ほか

39　第145号土坑を中心として

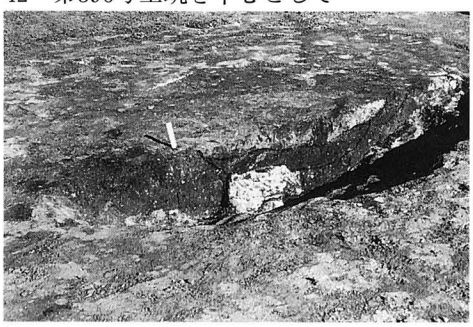
40　第167号土坑を中心として

41　第219号土坑を中心として

42　第396号土坑を中心として



43　第２号ロームマウンド



44　第４号ロームマウンド

45　発掘に携わった方々

稗田頭C遺跡

——平成5年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成6年3月10日　印刷
平成6年3月14日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原2丁目6番地1号（0266）72-2101（代）
印刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5（0262）44-0235